みずほの台遺跡群Ⅱ

（根本西台古墳群第３次・西刑部上原遺跡）

平成20年3月

宇都宮市教育委員会

三彩陶器（西荊部上原遺跡SI－3出土）

序

宇都宮市瑞穂野地区は，数多くの集落跡や古墳群が所在する，長い歴史と伝統をもつ地域として知られてまいりました。

近年，当地区及び隣接地区において，大規模な開発が次々と行われるようになり，それに伴う発掘洞査の増加によって，数多くの貴重な成果が得られております。

トヨタウッドユーホーム株式会社による住宅団地の造成においても，これまで何度かの発掘調査が管われ，当地区の歴史を知る手がかりとなるさまざまな資料が発見されました。

本報告書は，そのなかでも根本西台古墳群・西刑部上原遺跡のうち、工事によって影響を受ける部分の発掘調査成果をまとめたものであります。

調査は，宇都宮市教育委員会が調査主体として必要な事務を行い，トヨタウッドユーホーム株式会社が費用を負担し，株式会社日本窯業史研究所が現地における発掘調査と調査成果の整理・報告書の作成を担当するという体制で行われました。

本書はまとめられた調査成果が，さまざまな方面で広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが，埋蔵文化財に係る協議から発掘調査・報告書刊行にいたるまで多大なご理解・ご協力をいただきました関係各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

宇都宮市教育委員会

教育長　伊　藤　文　雄

例　言

1. 本書は栃木県宇都宮市西刑部町他の所在する，みずほの台遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書で，「根本西台古墳群22号墳」，「西刑部上原遺跡」を収録する。
2. 発掘調査は，トヨタウッドユーホーム株式会社が施行する「みずほの台ニュータウン」建設に伴うもので，事業主の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし，調査実務は同社より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所がこれにあたった。
3. 野外調査は，根本西台古墳群が平成19年７月より同年８月，西刑部上原遺跡は同年７月～９月まで実施した。報告書作成作業はその後断続的ながら，平成20年３月まで行った。
4. 野外調査は，両遺跡とも水野，柏崎が担当した。報文の執筆は，Ⅰ，Ⅱ－１・3，Ⅲ－１・３は水野が，Ⅱ－2，Ⅲ－２は柏崎が執筆したものを水野が補訂した。
5. 調査組織

調査主体者・宇都宮市教育委員会

伊藤文雄　教育長
渡辺　卓　文化課長
大塚雅之　文化財保護グループ係長
神野安伸　文化財保護グループ

調査実務者・㈱日本窯業史研究所

水野順敏　調査担当者
柏崎広伸　調　査　員

6. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。
7. 野外調査作業から整理・報告書作成作業において下記の機関，方々よりご助力とご指導を賜った。記して謝意を表する。

トヨタウッドユーホーム㈱，野澤實業㈱，㈱ニッポーコーポレーション，㈱都市開発コンサル，㈱テクノプランニング，㈱ダイショウ，岩上照朗，足立佳代，上野修一，大澤伸啓，今平利幸，篠原祐一，鈴木一男，須田　勉，橋本澄朗，梁木　誠

調査・整理作業参加者

稲毛　清，後藤ゆか里，佐藤達男，鈴木　清，鈴木タミ，長谷川健二，福富　準，藤田文子，藤田俊雄，松村民子，森脇一也　（順不同・敬称略）

凡　例

1. 本遺跡の略号は，古墳群がＭＮＴ－Ｎ，西刑部上原遺跡がＭＮＫである。また，遺構の略号はSI－竪穴住居跡，SB－掘立柱建物跡，SK－土坑，SD－溝，Ｐ－小穴，PT－住居内小穴等
2. 第２図は，国土地理院発行の２万５千分の１地形図『宇都宮東部』『上三川』を部分複製した。
3. 遺構実測図の縮尺は，古墳の墳丘図１/200，周濠土層，石室，住居跡，土坑１/20，小穴列群１/120を基本とし，これ以外はスケールによる。遺物実測図は，土器１/3，大型土器１/4，鉄製品・石製品１/２を基本とする。遺物写真の縮尺は統一していない。
4. 図面の北の方位は磁北を示す。断面図等の水準線上の数字は海抜標高を示す。
5. 挿図の遺物番号は本文及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○―□の前が挿図番号，後が遺物番号である。
6. 遺構図面で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

焼土・焼け面　　カマド用材

7. 遺構平面図中の●は土器，▲は金属・石製品の出土位置を示し，ゴシックの数字は遺物番号である。

目　　次

Ⅰ　はしがき
1. 調査に至る経緯と経過 …… 7
2. 遺跡の位置と環境 …… 9
(1) 地理的環境 …… 9
(2) 歴史的環境 …… 9
Ⅱ　根本西台古墳群第３次調査
1. 調査の概要と調査の方法 …… 12
(1) 調査の概要 …… 12
(2) 調査の方法と基本土層 …… 12
2. 遺構と遺物
(1) 22号墳 …… 14
(2) 土坑 …… 18
(3) その他の遺構・遺物 …… 18
3. まとめ …… 20
Ⅲ　西刑部上原遺跡
1. 調査の概要と調査の方法 …… 23
(1) 調査の概要 …… 23
(2) 調査の方法と基本土層 …… 23
2. 遺構と遺物 …… 26
(1) 竪穴住居跡 …… 26
(2) 掘立柱建物跡 …… 40
(3) 土坑 …… 42
(4) 小穴列群 …… 43
(5) 溝跡 …… 48
3. まとめ …… 48

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図
第２図　遺跡の位置と周辺遺跡
第３図　調査区全体図・基本土層図
第４図　22号墳墳丘（１）
第５図　22号墳墳丘（２）・周溝土層・石室（１）
第６図　石室（２）・出土遺物
第７図　土坑
第８図　第２・３次調査区と埋没谷
第９図　第１～３次調査石室比較図
第10図　調査区全体図・基本土層図
第11図　SI-1・2・同出土遺物
第12図　SI-3
第13図　SI－３カマド（東・北）
第14図　SI－３出土遺物（１）
第15図　SI－３出土遺物（２）
第16図　SI－４・カマド
第17図　SI－４出土遺物
第18図　SI－５・出土遺物
第19図　SI－６・掘方・カマド・出土遺物
第20図　SB－２・３
第21図　土坑
第22図　その他の出土遺物
第23図　小穴列B群
第24図　小穴列C群

表 目 次

第1表　周辺遺跡一覧表
第2表　古墳出土遺物観察表
第3表　SI－1出土遺物観察表
第4表　SI－2出土遺物観察表
第5表　SI－3出土遺物観察表
第6表　SI－4出土遺物観察表
第7表　SI－5出土遺物観察表
第8表　SI－6出土遺物観察表
第9表　その他の遺物観察表

図 版 目 次

図版1　A.22号墳石室確認状況（南より）　B.22号墳全景（南より）　C.22号墳周溝北側土層　D.22号墳周溝東側土層（南より）　E.22号墳石室（南より）　F.22号墳石室（北より）
図版2　A.22号墳石室側壁（東より）　B.22号墳石室根石・敷石上層（南より）　C.22号墳石室根石・敷石下層（南より）　D.22号墳石室根石（北より）　E.22号墳石室掘方（南より）　F.22号墳石室側壁断面（北より）　G.SK－57土層（南より）　H.SK－57・手前周溝（南より）
図版3　A.SK－53・手前周溝（西より）　B.SK－55・手前周溝（南より）　C.SK－56土層（南西より）　D.SK－56（南より）　E.SK－54土層（東より）　F.SK－54（東より）　G.SK－58（南より）　H.SK－59（北より）
図版4　A.A地区南側全景（東より）　B.A地区南側全景（西より）　C.B地区南側全景（西より）　D.SI－1（南より）　E.SI－2（北より）　F.SI－3東西土層（南より）　G.SI－3　H.SI－3掘方（南より）
図版5　A.SI－3掘方（西より）　B.SI－3北カマド（南より）　C.SI－3東カマド（西より）　D.SI－3三彩小壺出土状況　E.SI－3遺物出土状況　F.SI－4（南より）　G.SI－4掘方（南東より）　H.SI－4カマド土層（東より）
図版6　A.SI－4カマド内遺物（南より）　B.SI－4カマド（南より）　C.SI－5（南より）　D.SI－5掘方（南より）　E.SI－6南北土層（東より）　F.SI－6（南より）　G.SI－6掘方（南より）H.SI－6カマド東西土層（南より）
図版7　A.SI－6カマド（南より）　B.SI－6カマド遺物出土状況（南より）　C.SI－6カマド出土遺物（南より）　D.SB－1（北より）　E.SB－2（南より）　F.SB－4（東より）　G.SB－4　PT－1土層（東より）　H.SB－4　PT－1掘方工具痕（東より）
図版8　A.SB－4　PT－3セクション（東より）　B.SB－4　PT－3掘方工具痕（東より）　C.SB－4　PT－5セクション（南西より）　D.SB－4　PT－5掘方工具痕（西より）　E.SK－1土層（東より）　F.SK－1（北より）　G.SK－6土層（南より）　H.SK－6（北より）
図版9　A.SK－3（西より）　B.SK－4（右）,近代土坑（左）土層（西より）　C.SK－4（右）,近代土坑（左）（西より）　D.SK－5（東より）　E.SK－7（南より）　F.柱穴列B群全景（西より）　G.小穴列B群全景（東より）　H.小穴列C群全景（南より）
図版10　A.小穴列C群全景（東より）　B.小穴列C群土層タイプⅠ（南より）　C.小穴列C群土層タイプⅡ（南より）　D.小穴列C群土層タイプⅢ（南より）　E.小穴列C群工具痕　F.小穴列C群工具痕　G.近代土坑埋積土（西より）　H.A地区基本土層1（南より）
図版11　SI-1～3出土遺物
図版12　SI-3～6出土遺物

Ⅰ　はしがき

1.調査に至る経緯と経過

遺跡は宇都宮市西刑部町地内に所在し，トヨタウッドユーホーム㈱が施行する，（仮称）みずほの台ニュータウン建設に伴なう第４次調査である。

当該開発計画の面積は約31haに及ぶ広大なもので，同市西刑部町・上桑島町，下桑島町に跨って所在する。計画当初の平成10年当時は，周知の遺跡として根本西台古墳群（県№3325），桑島台古墳群（県№3324）が計画地の南東部に所在し，中央部に東山道のルートが推定されていた。平成10年７月～翌11年11月まで，第１次調査として約２万㎡を調査し，部分的なものも含め，根本西台古墳群で13基（うち１基は地区外で位置確認のみ），桑島台古墳群で２基の古墳を確認した。なお，桑島台古墳群では周湟の一部を調査したのみである。また，根本西台古墳群では古代の土坑の他に中・近世の土葬墓，火葬跡が多数見られた。

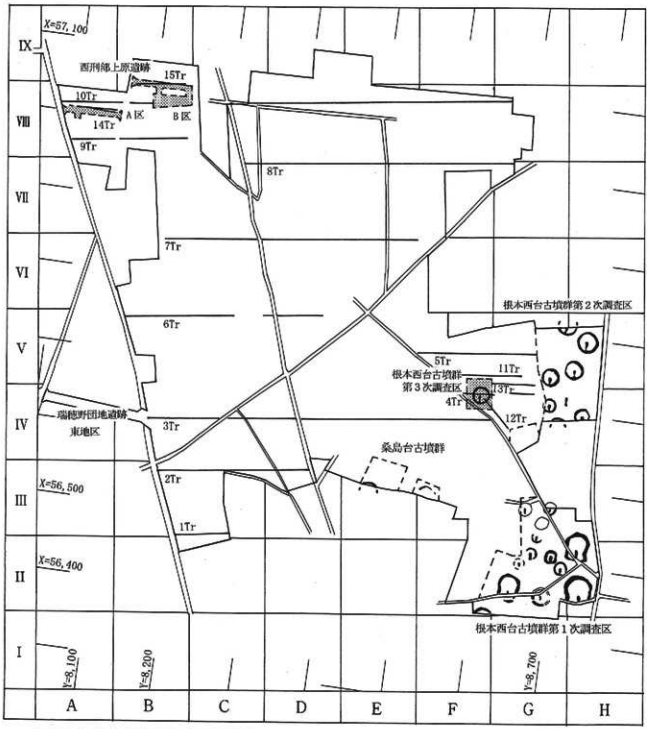
その後，諸般の事情により中断していた計画が平成17年末に至り再開された。空中写真により第１次調査区の北方で包蔵地以外の畑地に古墳の存在が推定されることから同年11月に試掘調査を実施した。その結果，６基の古墳を確認し，根本西台古墳群の範囲拡大と判断された。そこで第２次調査として約１万㎡を同年12月より翌18年９月まで実施し，８基の古墳と約100基の土坑を調査した。また，同年７月に本開発に伴なう放水路の敷設工事中に埋蔵文化財包蔵地以外の地域で竪穴住居跡が確認された。県教委との協議の結果，南西に隣接する瑞穂野団地遺跡の範囲拡大と判断され，翌８月～９月に発掘調査を行った。この遺跡としては２度目（３地区目）の調査で東地区と名称したが，開発関連の調査としては第３次調査となる。約1，800㎡において古代の竪穴住居跡７軒，掘立柱建物跡３棟などを調査した。

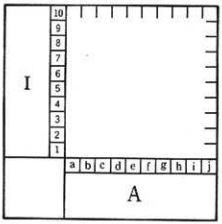
平成19年３月の開発認可を受け，５月より伐採が行われて，開発区域全体を網羅する試掘調査が可能となった。そこで，同年５月～６月に開発区域全域に対して延2.4㎞に及ぶ，幅２ｍの東西トレンチを設けて東山道跡を確認の為試掘調査を行ったが，道路跡は全く確認できなかった。しかし，第２次調査区の西方約70ｍで円墳１基，開発区域の北西隅で古代の竪穴住居跡，掘立柱建物跡などを確認した。古墳は根本西台古墳群の範囲拡大と判断された。集落跡は周知の包蔵地区外であり，前年調査を実施した瑞穂野団地遺跡東地区より400ｍも離れていることから，新規発見の手続きがとられ，小字名を冠して「西刑部上原（かみはら）遺跡」と名称された。また，中・近世以降と推定される10数口の小穴が等間隔で並ぶ小穴列が数条づつまとまって見られる，小穴列群などが確認された。この為第４次調査として，市教委を調査主体者として，事業主より委託を受けた当研究所が調査実務にあたった。

古墳は平成19年７月３日より調査を開始し，横穴式石室を持つ径21ｍ程の円墳１基と抉り込み土坑２基，縄文時代の土坑３基などを調査した。調査面積は約1,400㎡である。同年８月８日市教委による終了立会いを受け，途中お盆休みを経て同月21日にすべての野外調査を終了した。

集落跡は，現道を挟んで東・西に分かれていたが，道路用地と樹木の抜根によって地下の遺構が破壊される恐れのある部分の計1,900㎡が調査対象となった。調査は，同年７月24日より開始し，古代の竪穴住居跡４軒，掘立柱建物跡２棟の他，各時代の土坑や中・近世以降の小穴列群，溝跡などを調査した。また，同年９月10日市教委による終了立会いを受け，同月14日にすべての野外調査を終了した。

これら第４次調査の整理・報告書作成作業は平成19年10月より開始し，平成20年３月まで実施した。


X=57,100
西刑部上原遺跡
15Tr
10Tr
A区
B区
14Tr
9Tr
8Tr
7Tr
6Tr
根本西台古墳群第２次調査区
5Tr
11Tr
根本西台古墳群
第３次調査区
13Tr
4Tr
12Tr
瑞穂野団地遺跡
東地区
3Tr
桑島台古墳群
2Tr
1Tr
X=56,500
X=56,400
根本西台古墳群第１次調査区
Y=8,100
Y=8,200
Y=8,700
IX
VIII
VII
VI
V
IV
III
II
I
A
B
C
D
E
F
G
H


10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
I
a b c d e f g h i j
A

第１図　調査区配置図

2. 遺跡の位置と環境

（1）地理的環境

開発予定地は，宇都宮市西刑部町，下桑島町，上桑島町に跨って所在する。今次調査区の根本西台古墳群（第３次調査区）は西刑部町2,535番地１他，西刑部上原遺跡も西刑部町2,593番地２他に所在する。

栃木県の中央部に位置する宇都宮市は，県域の中央やや東寄りを南流する鬼怒川に跨って所在するが，市街地を含むその大部分は鬼怒川の右（西）岸に立地する。また，市域の南東および南部は関東平野の一角を占め，鬼怒川及びその水系の河川に沿って複数の低地や台地が南北に延びる。鬼怒川の流路に沿って鬼怒川低地があり，現在は大部分が水田として利用されているが，点在する微高地もある。また，鬼怒川と市域の中央部を南流する田川との間を南に向かって細長く延びる台地があり，東側が岡本台地，西側が田原台地と呼ばれる。

当地は，このうち東側の岡本台地の東端部に位置する。ことに根本西台古墳群は，鬼怒川低地に面する台地の縁辺部で，東方直下を越戸川が南流し，標高は93～94m，東下方の水田面との比高は４～５m程である。また，西刑部上原遺跡は，第２次調査区の北西方約550m，台地の東縁より西方約650mを南流する江川（船付川）の左（東）岸に所在する。なお，第３次調査として平成18年夏に調査を実施した瑞穂野団地遺跡東地区の北方約400mに位置し，これまで埋蔵文化財の包蔵地とは知られずに来た。今次調査区がその南端部にあたると推察されるが，開発区域の北西隅に位置し，遺跡全体の広がりは明確にし難い。古墳群と同じ岡本台地上に立地し，標高は94.5～95m。現在は圃場整備によりほぼ平坦な地形となっているが，地山面は今次調査区の中央を南北に通る現道付近を最高所とし，東と西に向って下降していた。現在の江川まで約220mの距離にあり，このまま川に向って下降するのではなく，所々に埋没谷等の凹地が所在する可能性が高い。

交通的には，JR宇都宮駅の南東方約６kmに位置し，西方約1.2kmを新４号国道が南北に，南方約0.9kmには北関東自動車道の宇都宮・上三川インターチェンジが設けられるなど，自動車交通の要衝である。この為，インター周辺では大規模な土地区画整理事業が施行され，既に大規模商業施設や住宅地等の利用が進捗している。

（2）歴史的環境

当地の周辺地域は，従前より多くの遺跡の存在が知られていたが，近年の度重なる大規模開発に伴う発掘調査の結果の蓄積がそれに拍車をかけている（第２図参照）。

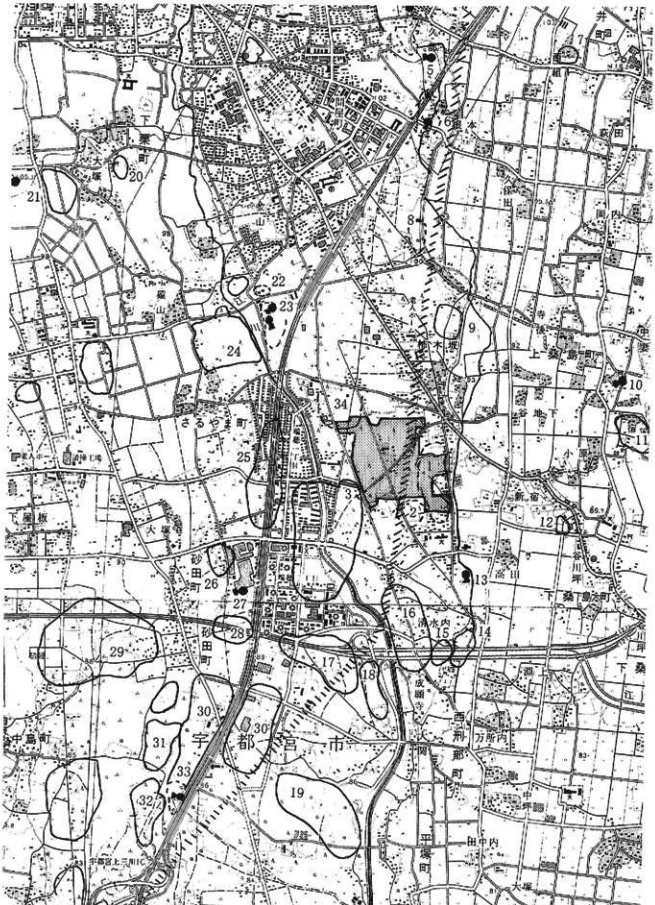
今次調査の対象となった根本西台古墳群（１）は，過去２度の調査成果とあわせ，南北500m以上，東西150mほどの範囲で23基の古墳を確認し，22基を調査したが，北と南側への広がりや１・２次調査区の中間域などを考慮すると本来は40基近い古墳が存在したと推察される。

また，第１次調査の際に極一部を調査した桑島台古墳群（２）は，今次調査区の南西方約130mに位置し，大部分が開発区域外となっており，雑木林の中に10数基が所在すると推定される。

なお，根本西台古墳群では少数ながら縄文時代の土坑が確認され，古墳の周溝や近代の土坑内より極少量の土器片や石器類が出土している。

さらに，古墳の周辺より奈良・平安時代の土器片が出土し，第１次調査区の南端では東西の延びる幅３m程の道路状遺構が確認された。また，中世～近世の土葬墓・火葬跡も多数認められた。

西刑部上原遺跡（34）は，今回新たに確認された遺跡で，古墳時代後期から平安時代にわたる古代の集落



第2図　遺跡の位置と周辺遺跡

跡である。遺跡は北に向かって広がっていると推察され，調査区はその南端にあたる。このうち，平安時代の住居跡からは奈良三彩の小壺片や墨書土器が出土した。この地区でも縄文時代の土坑が確認され，古代の住居跡より石鏃，打製石斧などの石器も出土している。

周辺の遺跡については，第２図，第１表に示した。

第1表　周辺遺跡一覧　　○は本遺跡群

No.	遺跡名	備　考
①	根本西台古墳群	前方後円墳3，方墳1，円墳15，不明2基調査（１～３次），30～40基と推定
②	桑島台古墳群	円墳2基調査（１次），10数基存在と推定
③	瑞穂野団地遺跡	古墳中期～平安の集落跡，3地区（1・2次）調査，旧石器，縄文土器も出土
4	三日月神社古墳群	円墳5～6基と推定
5	久部浅間山古墳	墳頂32mの前方後円墳
6	久部愛宕塚古墳群	前方後円墳1，円墳3基
7	石井城	室町時代の城館跡
8	石井久保田古墳群	前方後円墳1，円墳1，不明1基
9	栢木坂遺跡・古墳群	縄文中期の集落跡，前方後円墳1，円墳1基など
10	小脈高尾神社古墳	微高地上の前方後円墳，墳長36mを含め9基以内
11	桑島城跡	鎌倉時代の城館跡
12	根本遺跡	微高地上の縄文中・後期の集落
13	飯塚古墳	墳長38mの前方後円墳，クビレ部に横穴式石室
14	飯塚山古墳・成願寺北遺跡	前方後円墳と奈良・平安時代の集落跡
15	成願寺遺跡・古墳群	古墳中・後期の集落跡，方墳3，円墳4，不明1基の古墳群
16	藤植遺跡	奈良・平安時代の散布地
17	大関台遺跡	古墳後期～平安時代の集落跡？
18	小脈原遺跡	奈良・平安時代の集落跡
19	小脈原高塚群	近世の高塚群？
20	大塚神社古墳	円墳2基
21	下泉大塚古墳	終末期の径43.5mの円墳，小円墳1
22	天王山遺跡・古墳	縄文・平安の散布地，円墳3基確認
23	東原古墳群	前方後円墳2，円墳4基
24	猿山城跡・古墳群	中世城郭，前方後円墳2，円墳9基など
25	猿山遺跡	奈良・平安時代の集落跡
26	下桑島西原古墳群	円墳2，方形周溝遺構を調査
27	南原古墳	墳長35mの前方後円墳
28	上横田A遺跡	古墳後期・平安の集落跡
29	砂田遺跡	15万㎡の大集落跡，古墳中～平安の集落跡
30	西荆部匠原遺跡	新4号国道に跨って所在，西側で古墳後期～平安の集落跡
31	中島古墳群・笹塚遺跡	古墳5基，古墳～平安の集落跡
32	磯岡北遺跡・古墳群	古墳中期～奈良の集落，推定古代東山道調査，円墳8基
33	琴平塚古墳群	墳長52mの琴平塚を含め前方後円墳3，円墳11基
㉞	西荆部上原遺跡	古墳時代後期～平安時代の集落跡，住居跡6軒，掘立柱建物跡4棟など

Ⅱ　根本西台古墳群第３次調査

1. 調査の概要と調査の方法

（1）調査の概要

今次調査は，Ⅰ章に記した如く，平成19年５月～６月に実施した東山道跡確認のための試掘調査に際して，第２次調査区の西方約70mに単独で確認されたもので22号墳と名称した。第２次調査区の西寄りは浅い埋没谷が所在したり，圃場整備によってハードローム面まで削平されるなどしており，調査時には古墳群はここまで広がらないと考えていた。前回の第２次調査区の南西方約200mには桑島台古墳群が所在するが，第１次調査の際の試掘調査により，両群の間には埋没谷があってこれにより区分されると判断された。

今次調査においても，22号墳の南に埋没谷が認められ，この古墳の東側（第２次調査区との間）を通って北に向かっていることが確認された。本古墳群ではいずれの石室も半地下式で，深さ0.7～1.4m程の墳穴内に構築されていることから，地山が深い位置にある埋没谷を避けて古墳が築かれたと推察される。

本調査は，平成19年７月３日より開始し，同年８月21日まで実施した。本墳は二つの耕作地に跨っていて，南半部が圃場整備によって削平され，北半部も耕作土の直下が旧表土という状況で，封土による墳丘は全く存在しなかった。また，近年旧耕作者により土取が行われたため南半分はさらに遺存状態が悪化していた。天井部，奥壁は既に無く，側壁の多くも失われていたが，敷石はほぼ遺存していた。前述の事情から，南半部は周溝も上部が削平されて浅くなっていたが，ほぼ全体を確認できた。また，古墳の周辺に小石室や抉り込み土坑の存在も想定されるため，南北約40，東西約30～35m程の範囲を調査区としたが，北半部の周溝内に該期の土坑２基と先行する縄文時代と推定される土坑が２基確認されたのみである。他には，土坑，溝などを確認したが，いずれも農耕関係の施設であり昭和時代それも第２次大戦前後の生活ごみが廃棄されたものが多く見られた。また，これらの近代土坑の１基からは昭和13年に鋳造の一銭銅貨が１枚出土している。

尚，本墳は周溝確認面などから古代の土師器片が３片出土した他は，墓道はおろか石室内からも全く遺物の出土は無かった。殊に石室に関しては，第１・２次の調査結果から埋積土を取り置いて篩掛け，その後に残存土砂粒の水洗も行ったが，１顆のガラス小玉も１片の鉄片も認められなかった。

市教委による現地指導を７月27日，終了立会いを８月８日に受け，お盆休みを挟み測量・実測等を終えたが，周辺の工事との関係で最後の全景写真撮影がのびのびとなり，同月21日にようやく終了することが出来た。

（2）調査の方法と基本土層

今次調査区は前述の如く，２か所の耕作地に跨っており，北半部は耕作土の直下に古墳築造時の旧表面を確認できたが，南半部はハードローム面まで削平されており，かろうじて遺存した石室部分も近年の土取りによって破壊を受けていた。また，封土は全く遺存しなかったことから，石室部分は人力により表土を除去したが，他は重機により表土（耕作土）を除去した後，人力で確認作業を行った。確認状態の写真撮影の後，周溝の埋積土を除去し，土層等の記録の後，墓道・石室等の調査を行った。墓道は後世の削平や耕作関連の土坑，溝跡に切られていて遺存状態は悪い。

埋葬主体部の石室は天井部・奥壁が失われ，土砂が充満していた。埋積土は残土置場の脇に取り置きし，乾燥させて篩掛けの後，残った粒子をさらに水洗いし微細な遺物を探したが全く出土しなかった。石室は完掘・残存状態の写真撮影の後，実測・写真撮影を行いつつ，解体して墳穴を露出させた。実測・測量はすべ

て人手で行った。

墳丘（周溝）測量の後，周溝内の土坑等の写真撮影，実測を行ったが，多数認められた耕作関連の土坑は時期が確認された時点で記録を省略した。

調査記録は，開発に伴う任意の基準点で行い，終了後に公共座標（世界測地系・第Ⅸ座標系）に合致させた（第３図）。

調査区の基本土層は次の通りである。

基本土層１・２

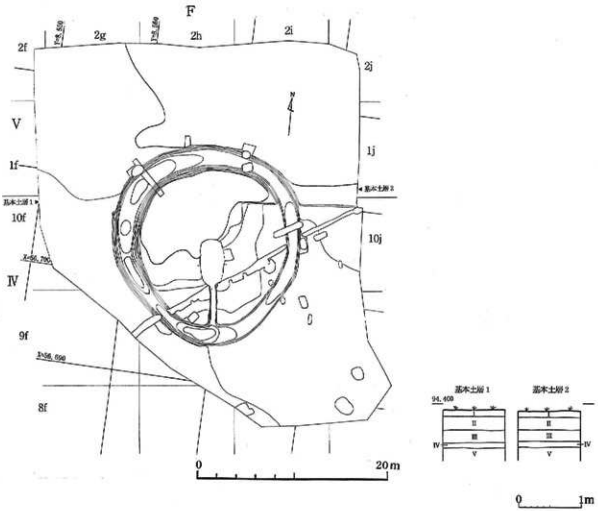
Ⅰ　表土

Ⅱ　旧耕作土

Ⅲ　黒褐色土（10YR２/２）　ローム粒（径１～３㎜）１％含む。やや軟質で粘性は無く締りは強い。

Ⅳ　暗褐色土（10YR３/３）　ローム粒（径１～３㎜）３％，今市パミス（径１～３㎜）３％，七本桜パミス（径１～２㎜）１％含む。やや軟質で粘性は無く締りは強い。ローム漸移層。

Ⅴ　ローム



第３図　調査区全体図・基本土層図

2. 遺構と遺物

今次調査区では，円墳１基と該期の土坑３基，縄文時代の土坑３基，の他は近代の土坑・溝などであった。

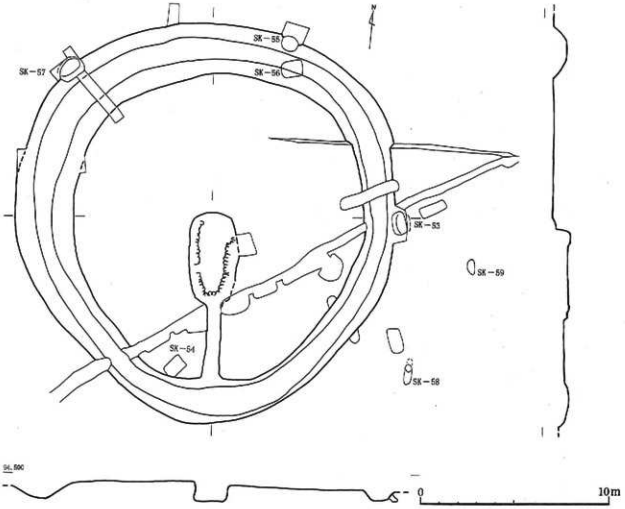
（1）22号墳

現況　調査地は荒地状態であったが，以前は水田として利用されており，墳丘が失われていてその存在は全くわからない状態であった。試掘調査によって周溝，石室が確認され，古墳と判明した。また，地権者が異なることから，古墳の中央より南側が削平されて北より一段低くなっていた。

位置　本古墳群の第２次調査区の西方において単独で確認されたもので，最も近い，16・20号墳まで70m程である。あまりにも離れて所在するため疑問に思い周辺にトレンチを追加して追及したが，本跡以外には全く認められなかった。なお，本墳の南東部には浅い埋没谷が所在し，本墳の東側を通って北に向かっていることが確認された。したがってこの埋没谷を避けて，やや西に離れた当地を占地したものと推察される。

また，南西約130mには第１次調査で部分的に調査した桑島台古墳群２号墳が所在するが，両者の間には埋没谷の存在が確認されている。

墳丘及び外部施設（第４・５図，図版１A.～D.）　南半部は削平されているが，平面形はほぼ円形で，中



第４図　22号墳墳丘（１）

央やや南寄りに南に向けて開口する横穴式石室が設けられていた。前述の如く封土は全く遺存せず，周溝内側の立ち上がりでの径は約17m で，周溝を含めた径は約21m であった。残存部の最も高い部分と周溝底面との比高は約85cm である。

周溝は幅160～33cm，深さは削平を受けている南半では25～35cm，北半では50～85cm で，西と北が深くなっていた。壁は弧状に立ち上がり，断面は逆台形である。埋積土は３層に大別され，黒褐色土，黒色土，黄褐色土で全体に良く締り，自然埋没である。確認作業中に西側確認面で土師器坏・台付甕小片が出土した。

本墳は葺石の施設や埴輪の樹立は無かったと推察される。

墓道は，長さ４m，幅0.8～１m，深さ約25～30cm で，ほぼ直線的に南側周溝に連なる。底面はほぼ平坦だが，南に向かって緩やかに下降する。壁は直立気味で，断面は箱型である。埋積土は，上層が黒褐色土，下層が暗褐色土であった。

埋葬主体部（第５・６図，図版１E・F.，２A.～２F.）　石室は上位の破壊が著しく，確認面には多量の石材が散乱していた。天井部・奥壁は失われていたが，側壁は２～４段程存在していた。袖無形の河原石小口積横穴式石室である。旧地表面より掘り込まれた，長さ約490cm，幅約250cm，深さ（北で）80cm の墳穴内に構築されていた。羨道を含む全長は約414cm，主軸方位はN－17°－W である。玄室奥壁は失われていたが，墳穴底面の痕跡から，幅90cm，奥行65cm 程の鏡石が据えられていたと推察される。側壁は径約７～25cm，長さ約15～45cm の細長の河原石を小口積みしていた。側壁の残存高は最高で約50cm，４段の石積みが羨道まで遺存していた。玄室の床（埋葬）面は墳穴底面に厚さ５cm ほど整地した上に径４～24cm の扁平な河原石を主体に約12cm の厚さで敷き詰められていた。なお，用材の大きさにはばらつきがあり，最大で径35cm のものも見られ，扁平な石が縦位になっているなど後世の攪乱を受けた可能性が高い。

玄門部については明確でないが，玄室敷石の途切れる墳穴南端部の底面に南北40cm，東西65cm 程の範囲に大型の石材が据えられてあったと思われる痕跡がありその部分が約20cm 程凹んでいた。おそらく框石が据えられていたものと推察される。

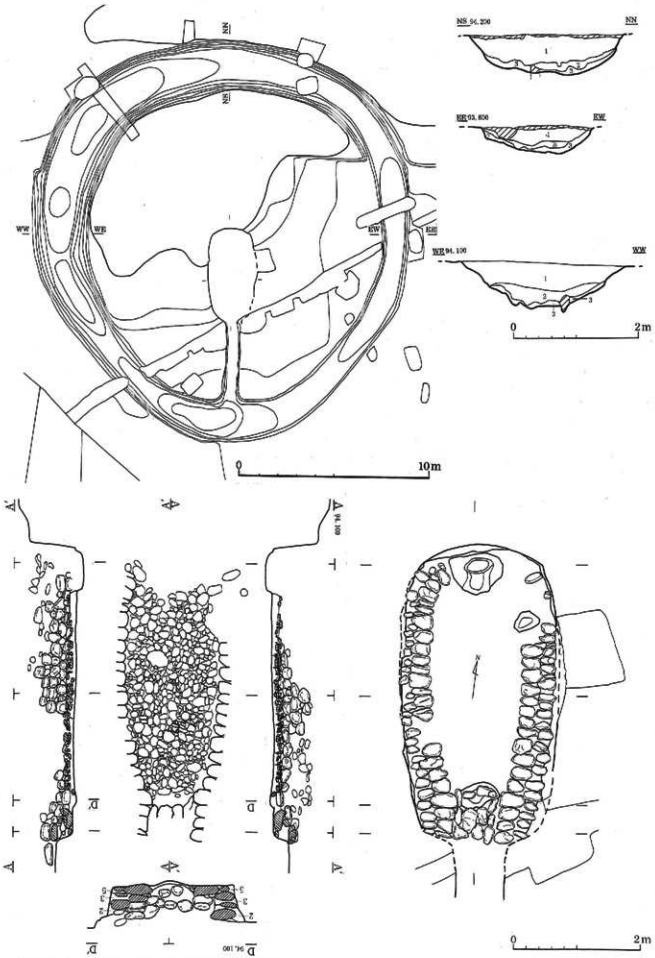
玄室の壁材と墳穴との間には，構築時の裏込めが遺存した。側壁の根石部を中心にこれらより小振りな同形の石を並べており，黒色土混じりのローム土で突き固められていた。なお，土層観察から７～25cm で作業したと判断され，石積み一段毎に突き固められたと推察される。

羨道部は，側壁が玄室より継続し，壁に区画の施設は認められなかった。壁の残存高は30cm 程である。前述の框石の痕跡と推定される部分より南側の床面には，南北60cm，東西70cm 程の範囲に，長辺を石室主軸にそろえて細長の河原石が２列に並べられていた。この石の上には黒褐色土と壁材と同類の河原石が積まれており，追葬時の閉塞かと推察される。

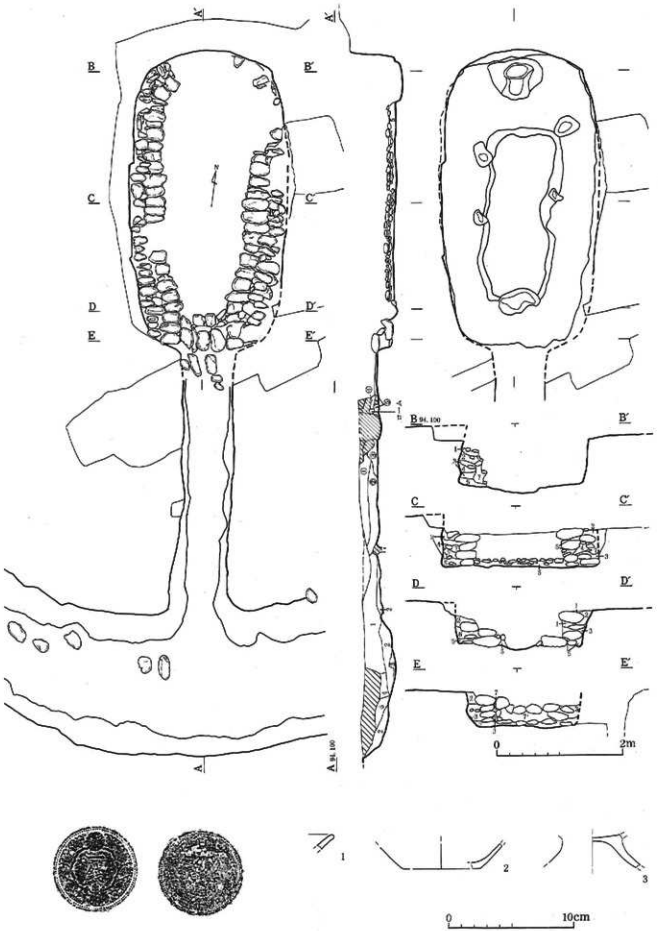
墓道北端の石室と接する付近の床面に，南北200cm，東西43cm の範囲でロームと灰黄褐色粘質土により締りの強い層が18cm 程の厚さで遺存した。構築当時の閉塞の痕跡と推察されるが，前記の如き遺存状態であり断定はし難い。

墳穴底面は，奥壁と框石の推定部分が深く掘り込まれており，これらを基準に石積みが行われたと考えられる。

遺物（第６図）　周溝西側の確認面（上層）や石室埋積土などより奈良・平安時代の土師器坏，台付甕片が３片出土した他は，全く出土し無かった。ことに石室は，過去２次の調査実績から，埋積土及び敷石内・敷石下の土砂を篩掛けし，残留土砂の水洗いも行ったが，成果は得られなかった。



第5図　22号墳墳丘（2）・周溝土層・石室（1）



第6図　石室（2）・出土遺物

第2表　22号墳出土遺物観察表（第6図）

（　）推定値　〔　〕現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	整　形	胎　土	焼成	色　調	出土位置	備　考
1	土師器 坏	口径　－ 器高　－ 底径　－	口辺部片	ロクロ成形	砂粒混和	良	にぶい褐色	周溝埋土	
2	土師器 坏	口径　－ 器高　－ 底径　(6.0)	底体部片	ロクロ成形 底部糸切り	粗形砂粒混和	良	淡橙色	石室埋土	
3	土師器 台付甕	口径　－ 器高　－ 底径　－	台脚部片	内外面横ナデ	粗砂粒多量混和	良	にぶい褐色 内底面灰色	周溝埋土	

（2）土坑

22号墳の周溝に接して掘り込まれた土坑2基を確認した。ともに，周溝の埋没途中に設けられたもので，古代の遺構と考えられる。

SK－53（第7図，図版3A.）

本墳の周溝東側の外壁に掘り込まれた抉り込み土坑である。

遺構　上面が開田により削平されていて，確認面はローム漸移層である。開口部は，平面がN－13°－Wを長軸とする楕円形で，規模は170×82cm。深さ約60cmで，底面はローム層中にあり周溝外（東）側に向かって緩やかに下降している。壁はほぼ垂直に掘り込まれた後，外に向って高さ30cm，奥行20cm，長さ110cm程抉りこまれていた。

埋積土は黒褐色土，暗褐色土，暗黄褐色土に大別される。

遺物は出土し無かった。埋積土の篩掛けも行ったが成果は得られなかった。

SK－57（第7図，図版2G.・H.）

本墳の周溝北東の外壁に掘り込まれた，抉り込み土坑である。

遺構　確認面はローム漸移層であるが，上部が撹乱を受けていたためで，本来は旧地表面付近で確認できるものと推察される。

開口部は，平面がN－45°－Eを長軸とする楕円形，規模は約140×70cm。深さ約60cmで，底面はローム層中にあり，外（北東）側に向って緩やかに下降している。壁はほぼ垂直に掘り込まれた後，外側に向って一段低く高さ20cm，奥行30cm，長さ120cm程抉りこまれていた。

埋積土は，黒褐色土，暗褐色土，にぶい黄褐色土の3層に大別でき，締りが強い。

遺物は全く出土し無かった。

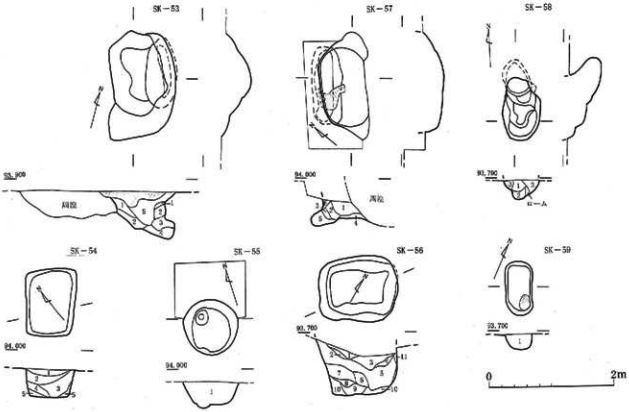
（3）その他の遺構・遺物

古墳時代以外の遺構としては，縄文時代の土坑2基，時期不明の土坑1基のほか近代以降の土坑・溝跡などがある。

SK－55（第7図，図版3B.）

22号墳の北東部の周溝脇で確認した。本跡の南約1mにSK－56が所在する。

遺構　確認面はローム漸に層下位で，南半部は周溝の掘削により切られていた。開口部・底面ともに平面は円形で，規模は開口部で径約86cm。底面はローム層中にあり，径約70cmでほぼ平らだが，北寄りに径約20



第7図　土坑

cm，深さ7cm程のくぼみが見られた。壁はやや外傾し，深さは約35cm。

埋積土はローム粒少量を含む暗褐色土で，非常に締りが強く，自然埋没と考えられる。

遺物の出土はなかったが，埋積土の状態から縄文時代の土坑と推察される。

SK－56（第7図，図版3C・D）

22号墳の北東部の周溝内で確認した。北約1mにSK－55が所在する。

遺構　周溝底面での確認面であるため，遺構確認面は田原ローム層中であるが，本来はSK－55同様にローム漸移層中と推察される。開口部は平面がN－70°－Eを長軸とする長方形で，規模は約126×105cmである。底面も同様の平面形で，規模は約83×50cm，ブラックバンド層中にあり，ほぼ平らであった。底面に小穴等の付属施設は確認できなかった。壁はやや外傾し，深さ約85cm。

埋積土は，黒色土，黒褐色土，暗褐色土，褐色土，ローム粒・塊の混合土の5層に大別され，最下層を除き今市軽石粒が混入し，いずれも非常に締りが強く，自然埋没と考えられる。

SK－59（第7図，図版3H）

調査区の中央東寄りに位置し，西方約4mに22号墳が所在する。

遺構　確認面はローム漸移層で，上位は構成の削平を受けていた。開口部，底面とも平面はN－12°－Wを長軸とする楕円形で，規模は開口部で約85×42cm。底面はローム層中にあり，ほぼ平らであった。壁はやや外傾し，深さは約25cm。

埋積土は，暗褐色土の単層で，今市軽石粒を含み，非常に締りが強い。

遺物の出土はなかったが，埋積土の状態から，縄文時代の土坑と考えられる。

SK－58（第7図，図版3G）

調査区南東に位置し，北西約3mに22号墳が所在する。

遺構　確認面はローム漸移層で，上位は後世の削平を受けている。開口部は平面がN－6°－Eを長軸とする楕円形で，規模は約100×60cm。底面はローム層中にあり，長軸に沿って北に向かって下降し，北端は高さ，奥行とも30cm程の横穴状に抉り込まれていた。

埋積土は黒色土，暗褐色土，にぶい黄褐色土の３層に大別され，締りは普通，自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無く，時期・性格とも不明である。

SK－54（第７図，図版３E・F.）

調査区南西で，22号墳の墳丘上に位置する。本跡の南側約１mには地境溝が東西に延びる。

遺構　上部が後世に削平されているため確認面がローム漸移層であったが，本来は耕作土直下より掘り込まれたと考えられる。開口部，底面とも平面はN－36°－Eを長軸とする長方形で，開口部の規模は約110×77cm。底面はローム層中にありほぼ平らで，壁はやや外傾し，深さは42cm。

埋積土は上層の黒褐色土と下層の暗褐色土に大別でき，上層に比べ下層の締りが弱い。

遺物は底面より昭和13年鋳造の一銭銅貨（第６図）が１枚出土しており，これ以降の施設と判断される。

3. まとめ

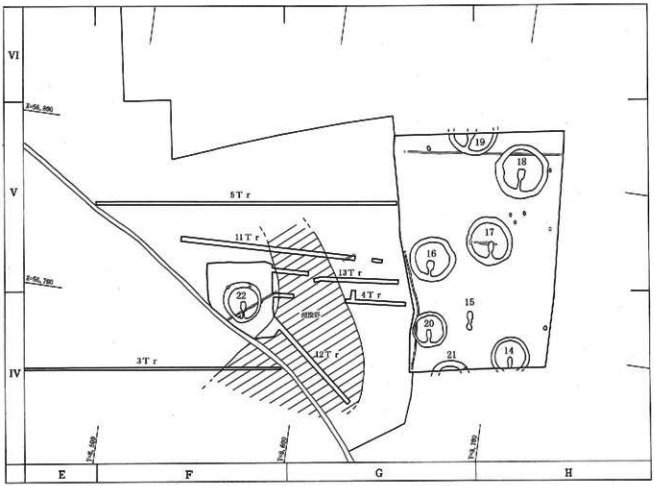
本古墳群は，これまで３次にわたる調査で22基の古墳を確認し，計21基（部分的なものも含む）を調査した。その内訳は，前方後円墳3，方墳1，円墳15，不明（周湟認められず）２基である。古墳群は台地の東縁に沿って南北約500m，東西約150mにわたって所在すると推定されるが，古墳の種類や分布状態などから，第１次調査区付近がその中心部と考えられる。

今次調査区の22号墳の東方約70mに位置する第２次調査区では，円墳7，不明１の計８基を調査したが，円墳のみが疎らに分布しており，古墳群の北端に近いものと推察された。この為，台地東縁から遠く離れる西方の当地区に古墳は存在しないと推測していたが，本墳が存在することが判明した。第１次調査区の埋没谷を隔てた西方約70mには桑島台古墳群（10数基で構成）が所在する。なぜ本墳が群より１基単独で西に離れて所在するのか疑問に思っていたところ，今回実施した試掘調査によって，本墳の南側と東側に埋没谷の存在が確認された。本古墳群ではすべて旧地表からローム層に至る深さ１m前後の横穴内に石室を構築していることから，本墳もローム層が深い位置にある埋没谷を避けて選地したものと推察される。

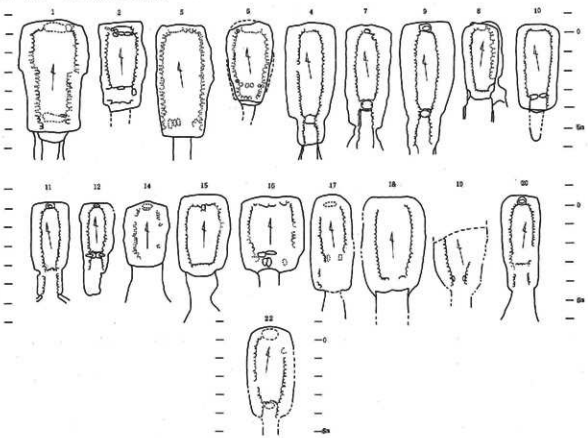
本墳は墳丘径（周湟内側の立ち上がりで）約17mと，本古墳群内では比較的大振りのグループに属しており，周湟が囲繞し，周湟内に抉り込み土坑が見られるなど必ずしも最末期の築造とは考え難い。また，東方の群内に本墳１基程度の空閑地が全く得られないわけでもない。おそらく，これら大振りの一群は一定の間隔（規制）の下に築造され，その後の小振り（周湟の見られないものを含む）の一群がその間隙に築かれたと推察される。したがって，他の大振りの古墳と一定の距離を保つに適した位置には埋没谷があって石室の構築には適さないため，やや離れたこの地に築造したものと考えられる。

石室は，天井部はもちろん，奥壁や框石，側壁の上部なども失われていたが，平面形はほぼ確認できた。壙穴内に玄室と短い羨道が構築されていて玄室と羨道の床面の高低差が少ない。したがって，過去の調査成果と比較すると，玄室と羨道の床面の高低差が大きい一群よりはいくぶん先行するものと推察し得る。

遺物は，周湟西側の確認面で平安時代の土師器坏，台付甕等の破片が出土したのみで，石室からは全く出土し無かった。玄室の敷石がほぼ遺存したことから，石室及び敷石の間隙とその下の土砂を篩掛けし，残った土砂粒を水洗したが一片の鉄片，１顆のガラス小玉も認められなかった。当初より全く副葬品が無かったとは考え難く，埋葬の後副葬品がさほど劣化しない比較的早い時期に持ち出された可能性が高い。



第8図　第2・3次調査区と堀没谷



第9図　第1～3次調査石室比較図

周溝（第5図）

1. 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）3%、ローム塊（径4～5cm）1%、赤色スコリア（径1～2cm）微量含む。軟質で粘性は弱く締りは強い。
2. 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）10%、ローム塊（径4～5cm）7%含む。粘性は弱く締りは強い。
3. ロームブロックと黄褐色土（10YR5/6）　5：4の混合土。粘性は弱く締りは強い。
4. 黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）5%、ローム塊（径1～10mm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。
5. 黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3mm）3%、ローム粒（径3～7mm）3%含む。粘性はなく締りは強い。

墓道（第6図）

① 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）5%、ローム塊（径4～5cm）3%、赤色スコリア（径3mm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。
② 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）15%、ローム塊（径4～5cm）3%含む。粘性はなく締りは強い。主体部周辺の埋土に類似。
③ ロームと暗褐色土（10YR3/3）　9：1の混合土。締りが強く清掃の残存と思われる。
④ 暗黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒（径1～3mm）3%、ロームブロック（径10～50mm）5%、黒褐色土（10YR2/2）10%含む。粘性はなく締りが極めて強い。掃除の残存か。
⑤ 灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　粘性があり締りは強い。掃除の残存か。

石室裏込め（第5・6図）

1. 明黄褐色土（10YR7/6）　粘性はなく締りは強い。
2. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）15%、ローム塊（径5～15cm）3%を含む。締りは強で黒色土（10YR2/1）少量混入。
3. にぶい黄褐色土（10YR5/4）　明黄褐色土（10YR7/6）粒・塊（径1～10cm）少量含む。
4. ロームブロックが主体で黒色土（10YR2/1）が20%程混入。締りは強い。
5. ロームブロックが主体で土に粘性する。変質層と思われる。
6. ローム（10YR5/6）　粘性は弱く締りは強い。
7. 黒褐色土（10YR2/3）　ローム塊（径1～3mm）10～20%含む。締りは強い。

SK－55（第7図）

1. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）5%含む。締りが極めて強い。

SK－56（第7図）

1. 黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）1%含む。粘性は弱く締りは強い。
2. 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）3%、ローム塊（径4～6cm）1%含む。粘性はなく締りは強い。
3. 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）5%、ローム塊（径4～5cm）1%、今市パミス（径1～8mm）微量含む。粘性はなく締りは極めて強い。
4. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）15%、ローム塊（径4～9mm）3%、今市パミス（径1～3mm）・七本桜パミス（径1～3mm）を微量含む。粘性は弱く締りは極めて強い。
5. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム塊（径4～5cm）1%、今市パミス（径1～3mm）、七本桜パミス（径1～3mm）微量含む。粘性はなく締りは極めて強い。
6. 暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒（径1～3mm）15%、ローム塊（径4～20cm）5%、今市パミス（径1～3mm）微量を含む。粘性はなく締りは極めて強い。
7. 褐色土（10YR4/4）　ローム塊（径1～3mm）20%、ローム塊（径4～30mm）多量、今市パミス（径1～3mm）微量含む。粘性は弱く締りは極めて強い。
8. 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）25%、ローム塊（径4～9mm）7%、今市パミス（径1～3mm）を微量含む。粘性はなく締りは極めて強い。
9. 暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒（径1～3mm）20%、ローム塊（径4～6mm）15%含む。粘性はなく締りは極めて強い。
10．ローム主体で部位が10%程入る。粘性はなく締りは極めて強い。
11．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒・塊を多量に含む。締りは強い。

SK－59（第7図）

1. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）3%、ローム塊（径4～8mm）1%、今市パミス（径1～4mm）微量を含む。粘性はなく締りは極めて強い。

SK－53（第7図）

1. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）20%、ローム塊（径4～5cm）5%含む。粘性はなく締りは強い。
2. 暗黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒（径1～3mm）30%、ローム塊（径4～10mm）3%、ロームブロック微量含む。粘性は弱く締りは強い。
3. 暗黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒（径1～3mm）10%、ローム塊（径4～10mm）10%、ロームブロック少量含む。粘性は弱く締りは強い。
4. ローム主体で暗黄褐色土（10YR4/3）が10%程入る。粘性がある程度は弱くて強い。張りがとれ始めの意味と思われる。
5. 黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3mm）5%、赤色スコリア（径3～5cm）微量含む。粘性は弱く締りは強い。

SK－57（第7図）

1. 黒褐色土（10YR2/2）と暗褐色土（10YR3/3）の8：4の混合土。ローム粒（径1～3mm）3%、ローム塊（径4～10mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。
2. 黒褐色土（10YR2/2）と暗褐色土（10YR3/3）の3：5の混合土。ローム粒（径1～3mm）3%含む。粘性はなく締りは強い。
3. 黒褐色土（10YR2/2）と暗褐色土（10YR3/3）の4：6の混合土。ローム粒（径1～3mm）3%、ローム塊（径4～8mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。
4. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）1%含む。黒褐色土（10YR2/2）が10%程混入している。やや軟質で粘性はなく締りは強い。
5. にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒（径1～3mm）1%、ローム塊（径4～10mm）5%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強い。

SK－58（第7図）

1. 黒褐色土（10YR3/2）　やや軟質で粘性はなく締りは強。
2. 暗褐色土（10YR3/3）とロームの6：4の混合土。ローム粒（径1～3mm）1%、赤色スコリア（径1～2mm）微量含む。やや粘性があり締りは強。
3. にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒（径1～3mm）1%、ローム粒（径4～8cm）3%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。

SK－54（第7図）

1. 黒褐色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）3%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強い。
2. 黒褐色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）10%、ローム粒（径4～6mm）1%含む。軟質で粘性は弱く締りは強い。
3. 暗褐色土（10YR3/2）　やや軟質で粘性はなく締りは強い。
4. 暗褐色土（10YR3/2）　ローム粒（径1～3mm）1%、ローム塊（径4～6cm）微量含む。軟質で粘性は弱く締りも弱い。
5. 暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）7%、ローム塊（径4～6cm）3%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強い。

Ⅲ　西刑部上原遺跡

1. 調査の概要と調査の方法

（1）調査の概要

本遺跡は，前述の通り先に実施した試掘調査により新たに確認されたものである。開発区域の北西隅に位置し，開発区域内における遺跡の推定面積は約8,100㎡である。試掘調査の成果から遺跡全体の南端部に位置すると推定されるが，大部分が地区外になり，全体の範囲は明確にし難い。なお，市教委との協議により本調査が必要とされたのは，埋土保存の対象とならない道路用地と樹木の抜根によって地下の遺構に影響が及ぶ部分の計約1,900㎡である。調査区の中央を南北に現道が通っており，その東側の工事が急がれていた為，東半部（B地区）から調査を開始し，終了後西側（A地区）の調査に着手した。

東側のB地区では縄文時代の土坑１基と平安時代の竪穴住居跡１軒の他，近世以降の小穴列群１か所，溝１条，土坑数基を調査した。西側のA地区では試掘調査のものも含め，縄文時代の土坑１基，古代の竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡４棟，土坑５基，近世以降の小穴列群２か所，溝跡１条，土坑数基などを確認した。

調査は平成19年７月24日より開始し，市教委による現地指導を７月27日，８月８日，終了立会いを９月10日に受け，９月14日にすべての野外調査を終了した。

（2）調査の方法と基本土層

A地区はすべて耕作地，B地区は耕作地と平地林であり，耕作地は重機により遺構確認面まで表土を除去した。B地区の平地林部分には径0.6～1.2m程の切株が密に見られることから，切株の間を縫うように重機で遺構確認面まで表土を除去した。その後，人力で遺構確認作業を行ったが，この部分は切株が非常に大きく，遺構の密度が疎であることから，調査に影響のある切株のみを人力で除去して調査を行った。

確認した遺構は，基本的には土層の記録の後，完掘して記録，遺物の取り上げ等を行ったが，近・現代の農耕関連の土坑，溝跡などは時期・性格が判明した時点で記録を省略した。

遺構の実測・測量はすべて人手により実施し，基準点は開発に伴なう任意の点（第１図）を利用したが，後に公共座標（世界測地系・第Ⅸ座標系）に合致させた（第10図）。

写真撮影は，個々の遺構には三脚・大型脚立を利用し，調査区全景等にはローリングタワーを使用した。

調査区の基本土層は，A地区とB地区では異なり，A地区は地山が西に向って下降し，開田に伴ない東側を削平して西側を埋め現在のような平坦地にしたとのことであり，西と東で大きく異なる。各調査区の基本土層を以下に図示する。

基本土層（A地区）

Ⅰ　表土

Ⅱ　褐色土（10YR４/４）　ローム粒（径１～３㎜）１％含む。上位に赤い酸化層が乗っている。田の床土である。

Ⅲ　黒色土（10YR２/１）　ローム粒（径１～３㎜）・赤色パミス（径２～４㎜）微量を含む。やや軟質で粘性はなく締りは強い。開田時の整地で撹乱を受けている。

Ⅳ　黒褐色土（10YR２/２）　ローム粒（径１～３㎜）１％，赤色パミス（径２～４㎜）・黄色パミス（径

2～6㎜）微量を含む。やや軟質で粘性が無く締りは強い。第Ⅲ層同様の撹乱を受けていると思われる。

Ⅴa　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3㎜）3％，ローム塊（径4～6㎜）1％，小石（径1～3㎜）微量含む。軟質で粘性は無く締りは強い。ローム漸移層である。

Ⅴb　暗褐色土（10YR3/3）とロームブロックの5：5の混合土。ローム粒（径1～3㎜）5％，今市パミス（径2～6㎜）1％含む。Ⅴa層同様にローム漸移層にあたると思われるが，中世以前の撹乱を受けている。

Ⅵa　明黄褐色土（10YR6/8）　今市パミス（径3～10㎜）1％，七本桜パミス（径1～3㎜）微量を含む。軟質で粘性は弱く締りは強い。

Ⅵb　黄褐色土（10YR5/8）　第Ⅵa層の変質と思われる。色調が若干暗い。

Ⅶa　褐色土（10YR4/6）　軟質で粘性は弱く締りは強い。暗色帯漸移層である。

Ⅶb　褐色土（10YR4/4）　第Ⅶa層の変質と思われる。色調が若干暗い。

Ⅷ　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　軟質で粘性は弱く締りは強い。暗色帯である。

Ⅸ　黄褐色土（10YR5/8）　軟質で粘性は無く締りは極めて強い。

Ⅹ　黄褐色土（10YR5/8）　第Ⅸ層と同様だが鹿沼軽石（径3～8㎜）を微量に含んでいる。鹿沼軽石層の漸移層と思われる。

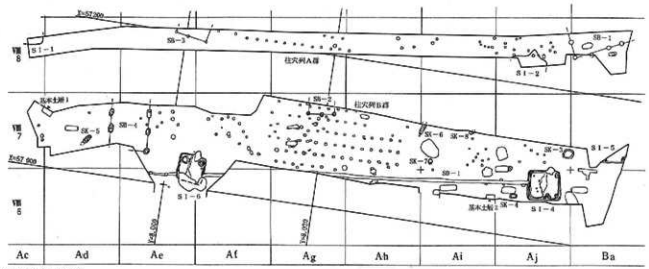
基本土層（B地区）

Ⅰ　表土

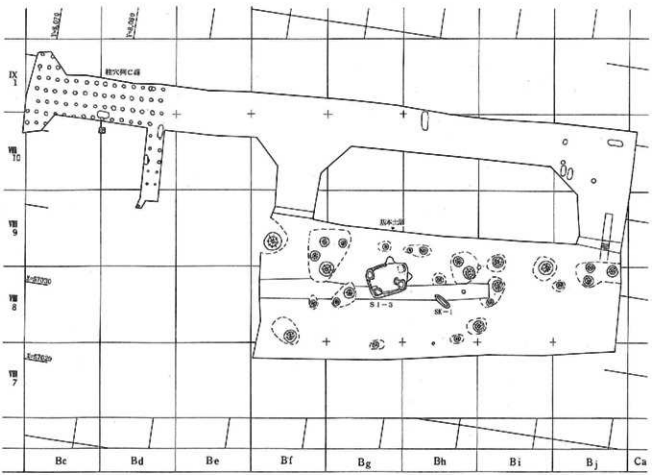
Ⅱ　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3㎜）1％含む。やや軟質で粘性は無く締りは強い。

Ⅲ　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3㎜）5％，今市パミス（径1～3㎜）1％含む。やや軟質で粘性は無く締りは強い。ローム漸移層。

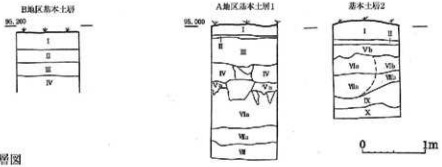
Ⅳ　ローム



A地区(1:500)



B地区(1:500)



第10図　調査区全体図・基本土層図

2. 遺構と遺物

今次調査区は西（A地区）と東（B地区）の２地区に分かれているが，その主体は古墳時代後期から奈良・平安時代の集落跡で，遺構はA地区に集中している。試掘調査分を含め，竪穴住居跡６軒，掘立柱建物跡４棟の他，性格不明の土坑なども見られた。また，縄文時代の土坑２基の他，近世以降と考えられる小穴列群３か所，土坑・溝跡なども確認した。

（1）竪穴住居跡

西側のA地区で5，東側のB地区１の計６軒確認したが，A地区の２軒（SI－１・２）は盛土保存が可能な為，位置の確認に留まった。

SI－１

遺構（第11図，図版４D.）

試掘調査によって，トレンチで確認した。開発区域の西端に位置し，南東約20mにSI－６が所在する。

確認面は黒褐色土層である。前記の事情から南東隅のみの確認であり，平面形・規模を含め不明と言わざるを得ない。なお，サブトレンチによる確認では，壁の残存高は約70cm，床面はローム層中にあり，ほぼ平坦で堅く締まっており，壁溝は認められなかった。柱穴，カマド等も不明である。

埋積土はローム粒を含む黒褐色土で２層に大別でき，締りが強く，自然埋没と考えられる。

遺物（第11図，図版11）

遺物は，土師器坏，甕，須恵器甕の破片などが出土した。

SI－２

遺構（第11図，図版４E.）

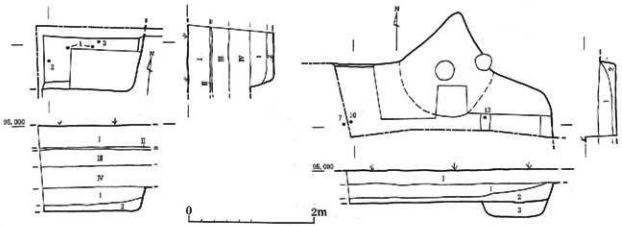
試掘調査で確認した。A地区東端部に位置し，南約14mにSI－４が所在する。カマド付近に，掘立柱建物跡の柱掘方と思われるものが１口重複していた。

確認面はローム漸移層（Va層）で，上部は開田時に削平されている。前記の事情から北辺のみの確認であり，規模・形状などは明確にし難い。北辺の現存東西長は約3.5m，南北は1.1m程調査した。サブトレンチでの確認では，壁の現存高は約30cm，床面はローム層中にあり，ほぼ平らで堅く締まっており，壁溝は認められなかった。また，東壁際の床面下には深さ25cm程の掘り込みが認められた。カマドは北壁の中央東寄りに，壁を切り込み灰色粘土で築かれていた。

埋積土は，暗褐色土と黒褐色土で，全体に焼土粒を含み，締りが強く，自然埋没と考えられる。

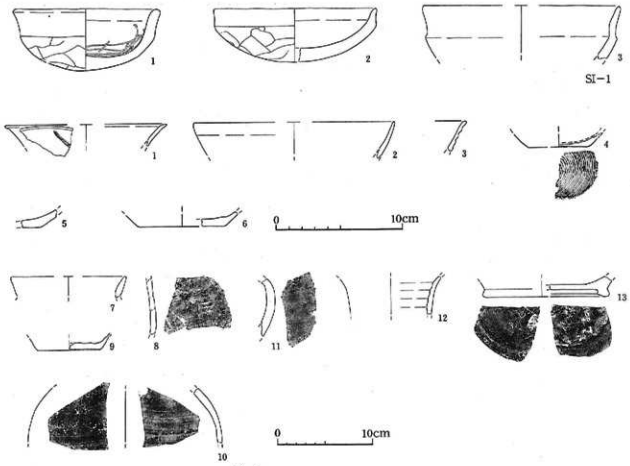
遺物（第11図，図版11）

遺物は，土師器坏，甕，須恵器壺などのほか，墨書（痕）の見られる土師器坏が出土したが小片のため判読できなかった。



SI−1
1．黒褐色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）10%含む。縁りは強い。
2．黒褐色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）15%含む。縁りは弱。

SI−2
1．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm），焼土粒（径1～3mm）15%含む。縁りに極めて強い。
2．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒・塊（径1～5cm）5%含む。縁りは弱。
3．2と同様するが（径10～30mm）ほどのロームブロックが混入。縁りは弱。



第11図　SI−1・2・同出土遺物

第3表　SI－1出土遺物観察表（第11図）

（　）推定値　［　］現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	整　形	胎　土	焼成	色　調	出土位置	備　考
1	土師器 坏	口径 12.0 器高 5.0 底径 丸底	70% 略完形	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内口辺横ナデ，底部不定方向の磨き	粗砂粒・白色粒少量含む	並	にぶい褐灰色	上層	底部外面に煤が付着。
2	土師器 坏	口径 (13.0) 器高 4.3 底径 丸底	50%	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内口辺横ナデ，体部ナデ	粗砂粒多量混和	並	黄橙色	中層	
3	土師器 坏	口径 (16.0) 器高 底径	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内口辺横ナデ，体部ナデ	粗砂粒少量含む	並	橙色	上層	

第4表　SI－2出土遺物観察表（第11図）

（　）推定値　［　］現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	整　形	胎　土	焼成	色　調	出土位置	備　考
1	土師器 坏	口径 (13.0)	口辺部片	ロクロ整形 内面黒色処理	粗砂粒，白色粒少量含む	良	外淡橙色 内黒色	中層	体部外面に黒斑，判読不可
2	土師器 坏	口径 (16.0)	口辺部片	ロクロ整形 内面黒色処理	粗砂粒微量含む	良	外淡橙色 内　黒色	中層	
3	土師器 坏		口辺部片	ロクロ整形 内面　黒色処理	白色顆粒粒含む	良	にぶい褐灰色 内黒色	中層	
4	土師器 坏	底径 (5.0)	底部片	ロクロ整形 底部糸切り	砂粒微量含む	やや悪い	淡黄橙色	中層	内面剥離
5	土師器 坏		体～底部片	ロクロ整形 底部糸切り 内面黒色処理	粗砂粒含む	良	外淡橙色 内黒色	中層	
6	土師器 坏	底径 (6.8)	底部片	ロクロ整形 底部糸切り	粗砂粒含む	並	にぶい褐灰色	中層	
7	土師器 甕	口径 (12.2)	口辺部片	外横ナデ	粗砂粒含む	やや悪い	外橙色 内黄橙色	上層	
8	土師器 甕		体部片	外ヘラ削り（磨滅） 内ヘラナデ	粗砂粒少量含む	やや悪い	外にぶい橙色 内暗褐色	中層	外面に一部煤付着
9	土師器 甕	底径 (6.6)	底部片	外体部横ヘラ削り	粗砂粒多量混和	並	橙色	中層	
10	須恵器 壺		体部片	ロクロ整形	緻密	良	灰色	中層	外面上部に自然釉
11	須恵器 壺		体部片	ロクロ整形	粗砂粒微量含む	良	灰色	中層	
12	須恵器 壺		頸部片	ロクロ整形	粗砂粒少量含む 緻密	良	暗褐色	中層	13と同一個体
13	須恵器 壺	底径 (13.4)	底部片	ロクロ整形 高さ0.7cmの付高台	粗砂粒微量含む 緻密	良	外暗褐色 内灰色	上層	底部外面にヘラ記号「×」，12と同一個体

SI－3

遺構（第12・13図，図版4 F.G.，5 A.～E.）

B区の南東部に位置し，周辺には該期の遺構は認められず，南東約4mに縄文時代のSK－1が隣接するのみである。

確認面は黒褐色土層である。径0.6～1.2mの大木の茂る平地林で，開田による削平を受けていなかった。平面は東西長約5m，南北長3.2～3.8mのやや不整の長方形。主軸方向は北カマドを通すとN－17°－W，東

カマドを通すとN－73°－Eである。壁の現存高は16～49cmでほぼ垂直に立ち上がる。床面はローム層中にあり，粗掘りの後整地して２～８cmの貼床を施しており，西から東に向かって緩やかに下降する。壁溝は幅15～20cm，深さ７cmでカマド部分を除く全体に設けられていた。主柱穴は確認できなかった。

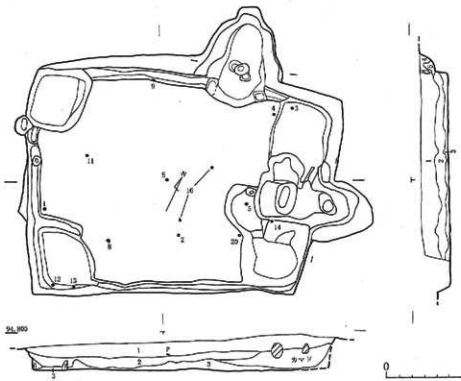
カマドは，北壁の東寄りと東壁の南寄りの２ヶ所に設けられていた。北カマドは，長さ1.6m，幅1.3mの楕円形で，北壁を切り込み灰褐色粘質土で構築されていた。火床はカマド中央の約15cm掘り窪められた部分と推定されるが，明瞭な焼け面などは認められなかった。袖部や支脚の遺存も見られなかったが，壁への掘り込み部分にはカマドの構築材と思われる灰黄色粘質土が多量に認められた。なお，調査当初，煙道と推定される位置より土師器甕の大型の破片が数点出土している。東カマドは，長さ1.6m，幅1.1m程で，壁を切り込み，灰褐色粘質土で構築されていた。火床は，中央部の深さ20cmの掘り込みの付近と思われるが，明確な焼面などは確認できなかった。袖部や支脚の存在も確認できなかった。北・東カマドとも，人為的破壊を受けており，カマドの造り替えや住居の移転に関するものと推定され，遺存状況からは北から東への移築が推定される。

床面下の調査で，４隅から深さ15～20cm程の掘り込みが確認されたが，いずれも床面構築に伴うものと判断される。

埋積土は，黒色土と黒褐色土の２層に大別され，焼土を少量含み，締りが強く，自然埋没と考えられる。

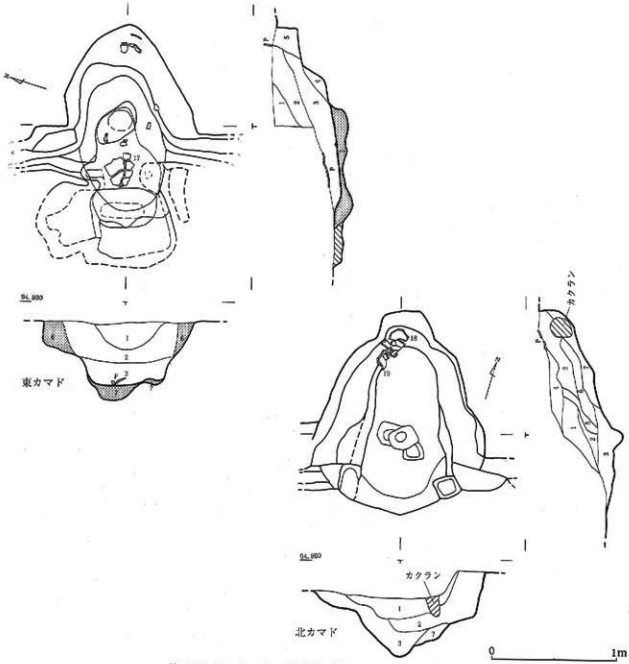
遺物（第12図，図版11・12）

遺物は土師器坏，高台皿，台付甕，甕，須恵器坏，鉢，甕，灰釉陶器壺，三彩小壺などが出土した。また，土師器坏には「田□」と判読し得る墨書の記されたものが２点見られた。



第12図　SI－3

SI－3
1．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～2mm）6%含む。締りは強。
2．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～2mm）8%，ローム塊・ブロック（径10～30mm）12%含む。締りは強。
3．黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒（径1～3mm）10%，ローム粒・ブロック（径10～50mm）20%含む。締りは強。
4．黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒（径1～2mm）1%含む。締りは強。
5．黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒・塊（径1～10mm）5%含む。締りは強。
6．黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒・塊（径1～10mm）25%含む。締りは強。
7．明黄褐色土（25Y6/6）　黒褐色土（10YR3/2）30%程混入。締りは強。



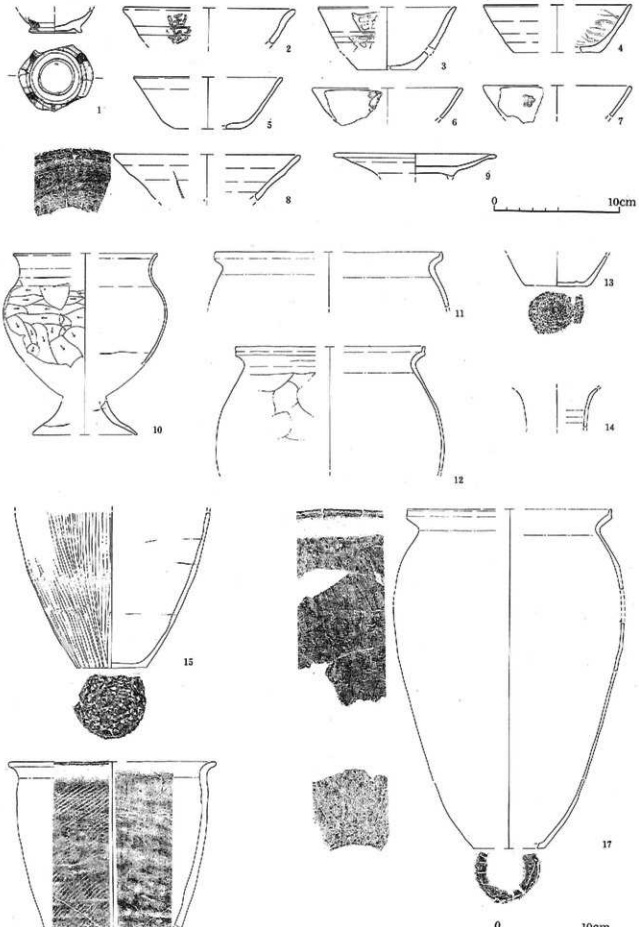
第13図　SI－3・カマド（東・北）

SI－3北カマド

1．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～2mm）2%，焼土粒（径1～2mm）2%含む。締りは柔。
2．黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒・塊（径1～65mm）30%，焼土粒（径1～3mm）3%含む。締りは柔。
3．灰褐色粘質土（10YR4/2）　焼土粒・塊（径1～12mm）6%含む。締りは柔。
4．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～2mm）2%含む。締りは柔。
5．黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒（径1～2mm）2%，焼土粒（径1～2mm）1%含む。粗りは柔。
6．灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　焼土粒・塊（径1～15mm）25%含む。締りは柔。
7．ロームと灰褐色粘質土（10YR4/2）の6：4の混合土。締りは柔。

SI－3東カマド

1．赤褐色土（7.5YR3/2）　焼土粒（径1～3mm）5%含む。締りは柔。
2．暗褐色土（7.5YR3/2）　焼土粒・塊（径1～5mm）8%，灰褐色粘質土（7.5YR5/2）30%含む。締りは柔。
3．黒褐色土（7.5YR2/2）　焼土粒・塊（径1～10mm）5%，灰褐色粘質土（7.5YR5/2）20%含む。締りは柔。
4．黒褐色土（7.5YR3/1）　ローム粒・塊（径1～30mm）15%含む。締りは柔。灰褐色粘質土が15%混入。
5．黒色土（10YR2/1）　締りが強い。
6．黒褐色土（7.5YR2/2）　焼土粒（径1～3mm）3%含む。粗りは柔。
7．ロームブロック主体。黒褐色土（10YR2/2）10%混入。締りは強い。

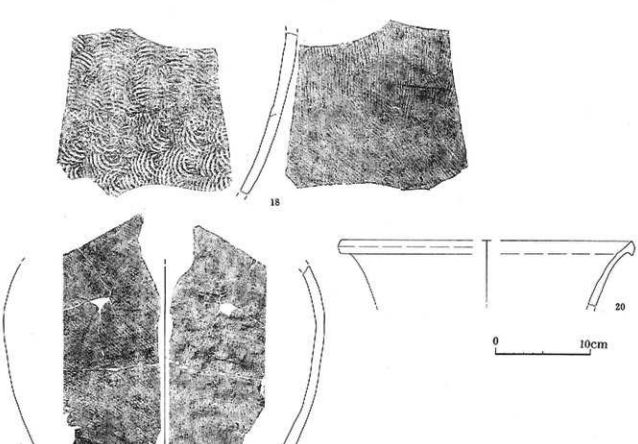


第14図　SI－３出土遺物（１）

第5表　S1－3出土遺物観察表（第14・15図）

（　）推定値　〔　〕現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	整　形	胎　土	焼成	色　調	出土位置	備　考
1	土師器 小壺	底径 4.2	体～底部片	ロクロ整形 付高台	粗砂粒微量含む	良	外白・茶・緑色 内透明釉	下層	奈良三彩、割れ口磨滅
2	土師器 坏	口径 〔14.0〕	口辺部片	ロクロ整形 内面黒色処理	粗砂粒微量含む	良	外橙色 内黒色	下層	外面に『田□』と思われる墨書がある
3	土師器 坏	口径 〔11.0〕 器高 5.0 底径 〔4.6〕	口辺～底部片	ロクロ整形 底部糸切り 内面ミガき	粗砂粒多量	良	外淡黄橙色 内黒色	下層	体部外面に墨書で『田□』と思われる墨書がある
4	土師器 坏	口径 〔12.0〕 器高 3.8 底径 〔7.0〕	口辺～底部片	ロクロ整形 底部糸切り 内面ミガき	粗砂粒少量含む	良	外淡黄橙色 内暗褐色	下層	
5	土師器 坏	口径 〔12.0〕 器高 4.2 底径 〔5.2〕	口辺～底部片	ロクロ整形 底部糸切り 内面黒色処理	粗砂粒混和	良	外淡黄橙色 内黒色	下層	
6	土師器 坏	口径 〔12.0〕	口辺部片	ロクロ整形 内面黒色処理	白色微砂粒微量含む	並	外に赤い橙色 内黒色	中層	外面に墨痕、判読不可
7	土師器 坏	口径 〔12.0〕	口辺部片	ロクロ整形 内面黒色処理	白色微砂粒微量含む	並	外に赤い橙色 内黒色	中層	外面に墨痕、判読不可
8	須恵器 坏	口径 〔15.0〕	口辺～体部片	ロクロ整形	粗砂粒多量混和 緻密	良	青灰色	中層	体部外面にヘラ記号『|』
9	土師器 高台皿	口径 13.2	70%	ロクロ整形 底部糸切り，後付高台 内面黒色処理	砂粒少量含む	良	外橙色 内黒色	下層	
10	土師器 台付甕	底部 〔11.0〕	脚部片	内・外面横ナデ	砂粒微量含む	良	橙色	カマド	内外面に煤が付着
11	土師器 甕	口径 〔24・0〕	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り（粗雑） 内口辺横ナデ，体部ナデ	粗砂粒混和	並	外淡橙色 内淡黄橙色	下層	他にも同一個体の破片が出土
12	土師器 甕	口径 〔20.0〕	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り（粗雑） 内口辺横ナデ，体部ナデ	粗砂粒多量混和	並	橙色	東カマド	一部に煤が付着，他にも同一個体が出土している
13	土師器 甕	底径 〔7.0〕	体～底部片	外体部ヘラ削り	粗砂粒少量混和	並	暗赤褐色	下層	内外面煤付着
14	須恵器 壺		頸部片	ロクロ整形	砂粒微量含む 緻密	良	暗赤褐色	下層	一部に灰釉が付着
15	土師器 甕	底径 7.2	体～底部片	外体部磨き 内ナデ	粗砂粒多量混和	やや悪い	淡橙色	東カマド	底部外面に煤付着 内面に貼土痕跡有痕
16	須恵器 甕	口径 〔22.0〕	口辺～体部片	ロクロ整形 外平行文叩き目，後ナデ 内ナデ	砂粒微量含む	良	灰色	下層	
17	土師器 甕	口径 〔21.6〕 器高 〔36.0〕 底径 〔7.4〕	60%	外口辺横ナデ 内口辺横ナデ，体部ナデ 底部外面に木葉痕	粗砂粒	良	赤褐色	東カマド他	東カマド煙道と住居内に散乱
18	須恵器 甕		体部片	ロクロ整形 外平行文叩き目 内同心円文当て具痕	砂粒少量含む 緻密	良	灰色	北カマド	内面の磨滅著しい再利用？
19	須恵器 甕	底径 〔20.0〕	体～底部片	ロクロ整形 外格子叩き目撫り消し 内ナデ	粗砂粒少量含む 緻密	良	灰色	北カマド（煙道）	
20	須恵器 甕	口径 〔31.0〕	口辺部片	ロクロ整形	粗砂粒少量含む 緻密	良	淡赤褐色	下層	



第15図　SI－3出土遺物（2）

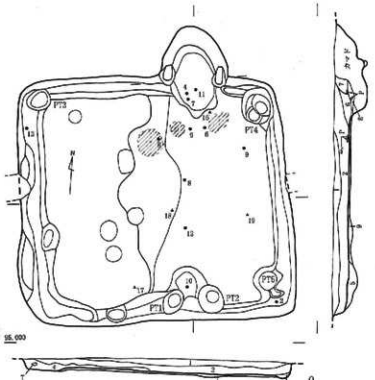
SI－4

遺構（第16図，図版5F.～H.，6A.，B.）

A地区の南東部に位置し，北東約6mにSI－5が隣接する。南側を東西に延びる後世の溝に切られていた。

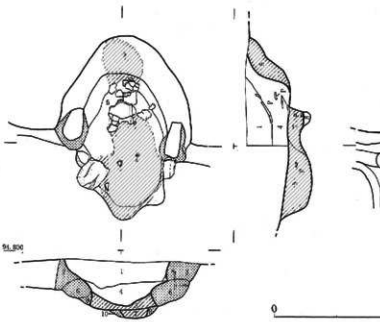
確認面はローム層であるが，本来はローム漸移層であったと推察される。平面は東西約4.2m，南北約4mの方形である。北壁にカマドを持ち，カマドを通る主軸方位はN－10°－Wである。壁は現存高14～20cmで，やや外傾する。床面はローム層中にあり，1～6cmの厚さで貼床が施されていたが，細かな凹凸が目立つ。また，竪穴の中ほどから西と東では床面の高さが異なり，東が15cm程低く造られていた。壁溝は幅15～25cm，深さ8～15cmで，カマド部分を除き壁下を囲繞していた。小穴は3口確認した。竪穴の中央やや北寄りのPT－1は平面形が径38×40，深さ17～20cmで，出入口に関する施設と推察される。南西を除く三方の隅にPT3～5を確認したが，深さ8～21cmと浅く，主柱穴とは断定し難い。

カマドは北壁の東寄りに，壁を切り込み，にぶい黄褐色土で構築されていた。規模は長さ1.5m，幅1.1mで，全体の遺存状態が悪いが，火床と袖の一部が認められた。火床は床面より7cm程堀窪めた後埋め戻しており，若干の焼面が見られた。また袖部は幅18～22cmで，壁より内側に10～15cm程遺存し，右袖では構築材に半裂品の打裂石斧が混入していた。煙道は火床より30°ほどの緩い角度で立ち上がり，所々に赤化した粘土が遺存していた。支脚は遺存しておらず住居の廃絶時に破壊されたものと推察される。また，カマドの南西部よ



SI−4

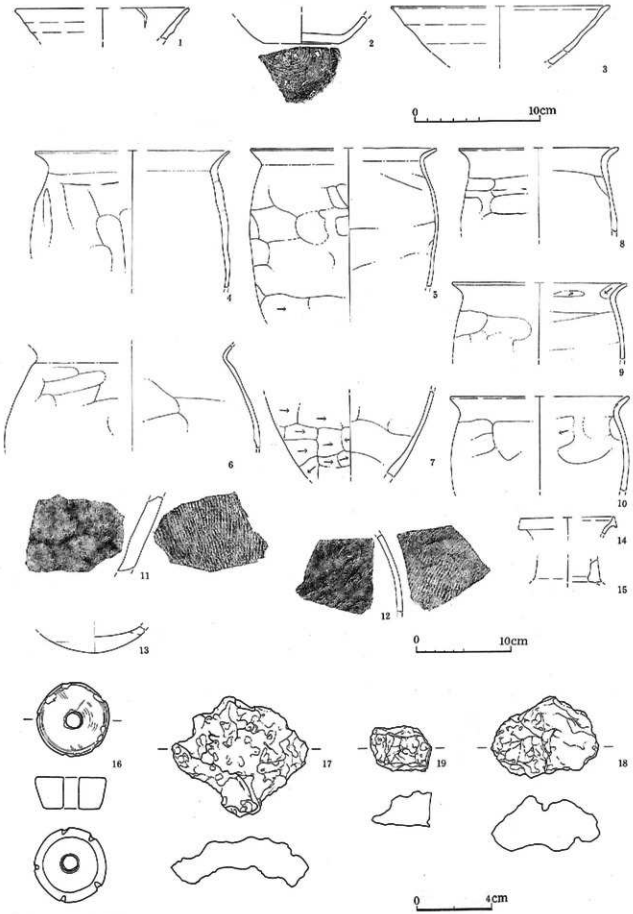
1. 黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1〜3mm）3%，焼土粒（径1〜3mm）1%含む。締りは並。
2. 黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1〜3mm）6%，焼土粒（径1〜3mm）3%含む。締りは並。下位にローム粒・塊（径5〜30mm）が4%混入している。
3. 黒色土（10YR2/1）　ローム粒・塊（径1〜20mm）15%含む。締りは並。
4. 黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒・塊（径1〜30mm）30%含む。締りは並。
5. 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒・塊（径1〜30mm）20%含む。締りは並。
6. 黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒・塊（径1〜8mm）15%，焼土粒（径2〜5mm）5%含む。締りは並。暗灰黄褐色土（2.5Y5/2）塊（径10〜25mm）が20%程混入し，カマドの崩壊土と思われる。
7. 黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒（径1〜6mm）6%，焼土粒（径2〜5mm）1%含む。締りは並。暗灰黄褐色土粒が混入し，カマドの崩壊土か。
8. 黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒（径1〜6mm）3%，焼土粒（径2〜5mm）2%含む。締りは並。暗灰黄褐色土粒が混入し，カマドの崩壊土か。
9. ロームと黒色土（10YR2/1）の7：3の混合土。ローム塊（径10〜30mm）を多量に含む。貼床。



第16図　SI−4・カマド

SI−4カマド

1. 黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒（径1〜3mm）7%，焼土粒・塊（径1〜8mm）5%，小石（径1〜3mm）微量含む。粘性は弱く締りは強い。
2. 黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒（径1〜3mm）7%，焼土粒（径1〜3mm）3%含む。粘性はなく締りは強い。
3. 黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒（径1〜3mm）3%，ローム塊（径4〜5mm）1%，焼土粒（径2〜4mm）1%含む。粘性があり締りに強い。にぶい黄橙色土（10YR7/4）が30%程混入。
4. にぶい黄橙色土（10YR5/4）　ローム粒・塊（径3〜20mm）微量。焼土粒（径1〜6mm）7%含む。軟質で粘性は弱く締りは強い。黒褐色土（10YR3/2）5%とにぶい黄橙色粘質土（10YR7/4）15%混入。
5. 明赤褐色土（2.5YR5/6）　焼土粒・塊（径3〜20mm）10%，炭化物粒・塊（径3〜7mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。にぶい黄橙色粘質土（10YR7/4）が10%程混入。
6. にぶい黄橙色粘質土（10YR7/4）　ローム粒（径1〜3mm）5%，焼土粒（径1〜4mm）1%含む。粘性が強く堅く締まる。
7. 赤褐色土（2.5YR4/6）　焼土層で炭化物粒・塊（2〜5mm）を微量含む。熱を受けて堅く締まっている。
8. 灰黄褐色土（10YR4/2）　焼土粒（径1〜3mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。
9. 黄褐色土（10YR5/6）　焼土粒（径2〜5mm）1%含む。粘性はなく締りは並。黒褐色土（10YR2/2）が30%程混入。
10. 明黄褐色土（10YR6/8）　熱を受けて黒く締まる。



第17図　SI－4出土遺物

第6表　SI－4出土遺物観察表（第17図）

（　）推定値　〔　〕現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	整形	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	土師器坏	口径（14.0）	口辺部片	ロクロ整形	粗砂粒少量含む	並	暗褐色	中層	
2	土師器坏	底径（6.0）	体～底部片	ロクロ整形 底部糸切り 内面黒色処理	粗砂粒少量含む	良	外淡黄橙色 内黒色	下層	外面に煤が付着
3	土師器鉢	口径（23.2）	口辺～体部片	ロクロ整形 外面ヘラ削り 内面黒色処理	粗砂粒少量含む	並	外淡橙色 内黒色	中層	
4	土師器甕	口径 20.4	40% 体～底部欠損	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内ナデ	粗砂粒含む	並	淡橙色	下層	一部に煤が付着 粘土紐接合痕
5	土師器甕	口径 19.6	50% 口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内口辺横ナデ，体部ナデ	粗砂粒多量混和	やや悪い	淡橙色	カマド	一部に煤が付着
6	土師器甕		頸～体部片	外頸部横ナデ，体部ヘラ削り 内ナデ	粗砂粒多量混和	並	にぶい橙色	下層	外面に煤が付着
7	土師器甕		体部下位片	外ヘラナデ 内ナデ	粗砂粒多量混和	やや悪い	外橙色 内暗褐色	下層	内面に煤が付着
8	土師器甕	口径（17.0）	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内ナデ	粗砂粒多量混和	並	外淡橙色 内暗褐色	下層	
9	土師器甕	口径（18.6）	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内ナデ	粗砂粒多量混和	並	外淡橙色 内橙色	下層	同一個体の破片出土
10	土師器甕	口径（19.0）	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内ナデ	粗砂粒多量混和	やや悪い	にぶい黄橙色	下層	外面に煤が付着
11	須恵器甕		体部片	ロクロ整形 外平行文叩き目 内当具痕をナデ消す	粗砂粒少量含む	並	外黒灰色 内灰色	下層	
12	須恵器甕		体部片	ロクロ整形 外平行文叩き目 内同心円文当具痕ナデ消す	粗砂粒少量含む	並	外灰色 内黒灰色	下層	外面に一部灰被り
13	須恵器鉢	底径 丸底	底部片	ロクロ整形	粗砂粒含む	並	灰色	下層	
14	須恵器壺	口径（10.0）	口辺部片	ロクロ整形	砂粒少量含む 緻密	良	灰色	中層	内面灰被り
15	灰釉陶器壺		頸部片	ロクロ成形	砂粒微量含む 緻密	良	外淡緑色 内淡灰色	撹乱	外面淡緑色の施釉 SI－4 と重複する撹乱より出土

No.	種別	大きさ（cm）	重量（g）	出土位置	備考
16	石製紡錘車	上径 3.8 下径 2.9 厚さ 1.7 孔径 0.8	43.6	床面	側面に縦位で5本の刻み
17	金属 鉄滓	長さ 7.2 幅 6.4 厚さ 1.5	83.5	床面	
18	金属 鉄滓	長さ 5.7 幅 4.0 厚さ 2.6	59.7	床面	片面はさび が厚く 鉛色
19	金属 鉄滓	長さ 3.2 幅 2.4 厚さ 1.8	20.2	床面	

り断面が10×20cmの楕円形で，現存長24cmほどの河原石が出土した。部分的に磨滅痕が見られたが，砥石，金床石とは決め難い。

カマドの南西，竪穴の中央北寄りに炉跡を確認した。東西約45，南北約35cmのほぼ円形で，5cm程の焼土が遺存し直下のローム面も硬化していた。さらに，カマドの前面に径30cm，厚さ1cm程の焼土が2か所認められたが，こちらは炉跡ではなかった。

埋積土は黒色土と黒褐色土に大別され，ともに焼土粒を含み，よく締まっていた。

遺物（第17図，図版12）

土師器坏，鉢，甕，須恵器壺，甕の他，石製紡錘車，鉄滓などが出土。他に比べ土師器甕類の量が多い。

SI－5

遺構（第18図，図版6C.，D.）

A地区の北東隅に位置し，南西約6mにSI－4が隣接する。大部分が調査区外にあり，南西の一部を調査し得たのみである。

上記の事情から平面形・規模は明確にし難い。確認面はローム漸移層で，南辺は現存長約3.1mを確認し，西端は竪穴の南西隅に近いと推定され，北側へは最大で2.5m程調査し得た。壁は現存高40cm程でほぼ直立する。床面はローム層中にあり，厚さ2～13cmの貼床が施され，ほぼ平らで堅く締まっていた。小穴は南壁際の東寄りに45×25cmの楕円形で深さ30cmの1口を確認した。本跡の規模・形状が不明で性格は明確にし難いが，確認位置から出入口関連の施設の可能性がある。なお，壁際の西端部は床面がやや軟弱であり，竪穴の隅に設けられることの多い床面下の掘り込みの可能性が高い。カマド・炉跡は認められなかった。

埋積土は黒褐色土で，焼土粒，炭化粒を含み，締りが強く，自然埋没と考えられる。

遺物（第18図，図版12）

遺物は，埋積土の中・下層より須恵器坏，土師器甕の破片などが出土した。

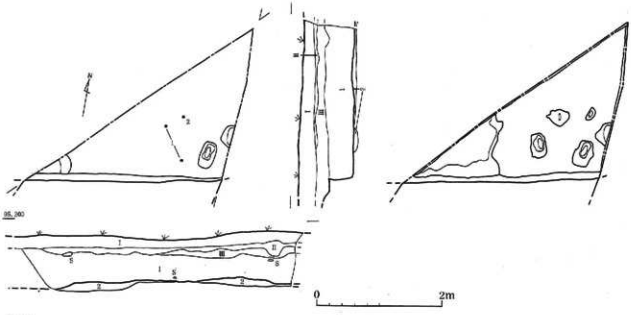
SI－6

遺構（第19図，図版6E.～H.，7A.～C.）

A地区の南西部に位置し，北西約6mにSB－4が隣接する。竪穴の中央やや南寄りが後世の東西溝に切られ，南壁はその大部分がごみ穴による攪乱で失われていた。

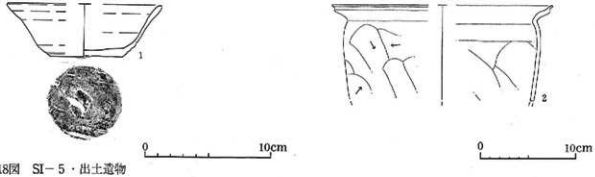
確認面はローム漸移層で，上位は開墾による削平を受けている。平面形は一辺約3.5mの方形で，北辺にカマドを持つ。主軸方位はN－10°－E。壁は現存高12～20cmでやや外傾して立ち上がる。床面はローム層中にあり，厚さ2～5cmの貼床が施され，全体に堅く締まっていた。なお，床面の東半部が西半部に比べ10cm程低くなっており，それぞれはほぼ平らに仕上げられていた。壁溝は西と東の壁下に部分的に認められ，幅10～15cm，深さ6～9cmであった。小穴は2口確認したが，主柱穴は確認できなかった。PT－1は径80cmの不整円形で深さ13cm，PT－2は径60cmの円形で深さ9cmであった。ともに竪穴の隅に位置し，床面下の掘り込みの可能性もある。

カマドは北壁の東寄りに，壁を切り込みにぶい黄褐色粘質土で築かれていたが，廃絶時に破壊されたものか全体に遺存状態が悪く，火床や袖部が明瞭でなく，支脚も認められなかった。カマドの推定規模は長さ1.4m，幅1.1m程である。なお，カマドの埋積土中より，土師器の破片とともに，ほぼ完形，半個体1の計2点の土師器坏が出土した。坏は内面の仕上げの状態から本来は黒色処理が施されていたものが火熱で消失



SI−5

1．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3mm）20%，炭化物粒（径5～10mm）1%，砂土粒（径1～2mm）微量含む。粘性はなく締りは強い。
2．黒褐色土（10YR2/3）とローム粒・塊の6：4の混合土。やや軟質で粘性はなく締りは弱。



第18図　SI－5・出土遺物

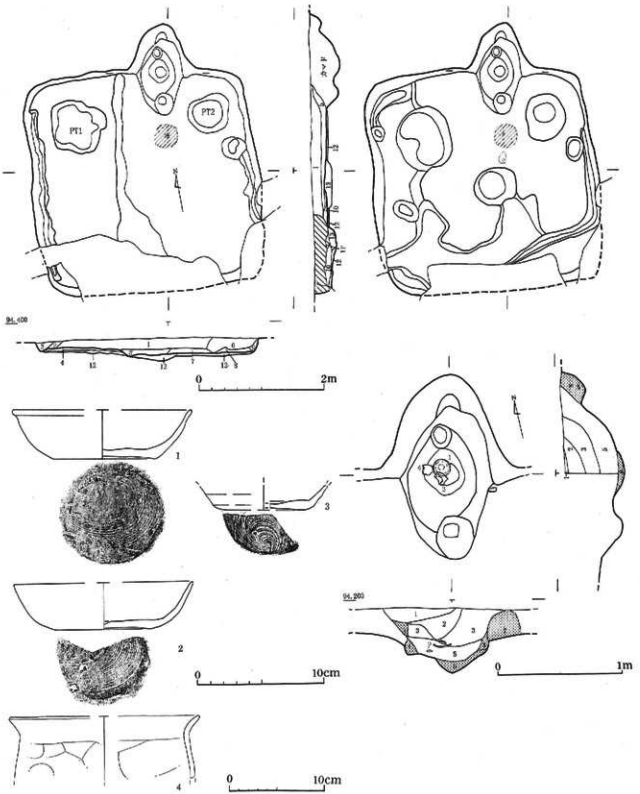
第7表　SI－5出土遺物観察表（第18図）

（　）推定値　［　］現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	造形	胎土	施釉	色調	出土位置	備考
1	須恵器坏	口径 12.4 器高 4.2 底径 5.7	80%	ロクロ整形 底部ヘラ起し	粗砂粒多混和	良	灰色	下層	
2	土師器甕	口径 (23.4)	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内口辺横ナデ，体部ナデ	粗砂粒含む	良	橙色	下層	他にも同一個体の破片出土

SI−6

1．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）7%，ローム塊（径4～7mm）3%，砂土粒（径1～4mm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱い。
2．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）1%，ローム塊・ブロック（径4～30mm）35%，砂土粒（径1～2mm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱い。
3．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）3%，ローム塊（径4～5mm）1%，砂土粒（径1mm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。
4．褐色土（10YR4/4）　ローム粒（径1～3mm）7%，ローム塊・ブロック（径4～40mm）20%，砂土粒（径1～4mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。黒褐色土（10YR2/2）が15%混入。
5．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3mm）15%，ローム塊（径4～8mm）5%，砂土粒（径1～5mm）3%含む。粘性は弱く締りは強い。カマド用材と思われる灰黄褐色粘質土（10YR6/2）が少量混入。
6．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）30%，ローム塊（径4～7mm）5%，砂土粒（径1～5mm）10%含む。粘性はなく締りは強い。
7．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3mm）40%，ローム粒（径4～7mm）3%，ローム ブロック（径10～20mm）3%，砂土粒（径1～3mm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱。
8．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3mm）10%，ローム塊（径4～8mm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱。ロームが30%程混入している。
9．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱。
10．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）7%，ローム塊（径4～6mm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。
11．灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム粒（径1～3mm）10%，ローム塊（径4～9mm）3%含む。やや軟質で粘性が強く締りは強。
12．黄褐色土（10YR5/6）と黒褐色土（10YR2/2）が7：3の混合土。ロームブロックを多量に含む。やや軟質で粘性はなく粘く締まる。泛水。
13．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）30%，ローム塊（径4～20mm）10%，砂土粒（径3～5mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。



第19図　SI－6・掘方・カマド・出土遺物

SI－6カマド

1．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）微出，焼土粒（径1～5mm）3%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。
2．黒褐色土（10YR2/3）　ローム塊（径4～8mm）1%，焼土粒（径1～4mm）2%，粘土塊（径4～6mm）微出含む。粘性はなく締りは強い。
3．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）1%，焼土粒（径1～6mm）3%含む。やや軟質で粘性は良く締りも弱い。にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）が10%混入。
4．褐色土（10YR4/4）　焼土粒（径1～3mm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱い。ロームが7%程混入。
5．暗褐色土（7.5YR3/4）　と黄褐色軟質土（10YR5/3）の6：4の混合土。焼土粒・塊（径1～10mm）7%，炭化物粒（径1～3mm）微出含む。やや軟質で粘性は弱く締りに強。

6．褐色土（10YR4/4）　焼土粒（径1～3mm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。ブロックを含むロームが7%程混入。
7．にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）　焼土粒（径1～6mm）15%，炭化物粒（径1～3mm）1%含む。軟質で粘性は弱く締りは強い。
8．暗褐色土（10YR3/4）　ローム塊（径4～6mm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。

したと判断され，廃絶前にカマド内に置かれていたものと考えられる。また，カマドの南側に径35cm円形で厚さ5cm程の焼土が認められ，床面が熱で硬化しており炉跡と考えられる。

埋積土は，黒褐色土，黒色土，褐色土，灰黄褐色土，黄褐色土などで，焼土を含み締りはよい。

遺物（第19図，図版12）

土師器坏，甕，須恵器坏などが出土した。

第8表　SI－6出土遺物観察表（第19図）

（　）推定値　［　］現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	整形	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	土師器 坏	口径 14.4 器高 3.9 底径 8.2	99% ほぼ完形	ロクロ整形 底部糸切り	粗砂粒多量混和	並	淡橙色	カマド	カマドより3の下に重なって出土。
2	須恵器 坏	底径 (7.0)	体～底部 片	ロクロ整形 底部糸切り	砂粒微量含む 緻密	良	灰色	中層	
3	土師器 坏	口径 (14.4) 器高 3.7 底径 (7.6)	50% 半完形	ロクロ整形 底部糸切り	粗砂粒多量混和	並	淡橙色	カマド	カマドより1の上に重なって出土。内面に一部黒煤付着
4	土師器 甕	口径 (20.0)	口辺～体部片	外口辺横ナデ，体部ヘラ削り 内ナデ	粗砂粒多量混和	並	外淡赤褐色 内淡黄橙色	中層	外面に煤が付着，カマド付近で出土。

（2）掘立柱建物跡

いずれも西側のA地区で確認し，建物跡として想定できたものは4棟である。すべて部分的な確認で全容を知り得るものは無く，SB－1・3は試掘調査に留まる。

SB－1

遺構

A地区北西隅（10Tr）に位置し，西約4mにSI－2，南約8mにSI－5が隣接する。南辺と西辺の一部を確認し，南辺は3間（6.5＋αm）以上，西辺は2間（2＋αm）以上，側柱式で東西棟の建物跡と推察される。柱間は南辺（桁行？）西より2.3＋2.5＋1.8m，西辺（梁行？）南より2mである。柱掘方は，径40cmの円形で，深さは30cm内外。主軸方位は南辺でN－65°－Eである。遺物は出土し無かった。

SB－2

遺構（第20図，図版7E.）

調査区の中央部に位置し，北西約18mにSB－3，南西約15mにSI－6が隣接する。

南辺の2間（3.4m），3口の柱掘方を確認したのみで，他は北に延びている。したがって，形状・規模は明確にし難い。柱間は西より，1.8＋1.6m，棟方位はN－82°－Eと推定される。柱掘方は径35～45cmの円形で，深さは25～35cm，柱痕跡は確認できなかった。遺物の出土は無い。

SB－3

遺構

調査区の北西部（10Tr）で確認し，南約10mにSB－4，南東約18mにSB－2が隣接する。

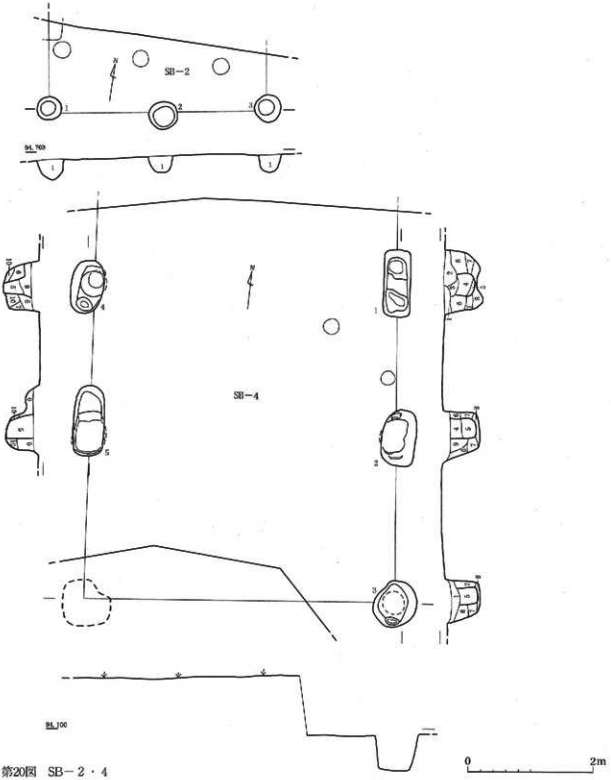
南辺の2間（4.3m），3口の柱掘方を確認したのみで，他は北に延びている。この為，本来の形状・規模は明確にし難い。柱間は西より1.7＋2.2mである。柱掘方は，径25cmの円形，試掘調査のため深さは不明である。棟方位はN－15°－EもしくはN－65°－Wと推定される。遺物の出土は無かった。

SB－2

1．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3cm）3%，ローム塊・ブロック（径10～30cm）を僅かに含む。粘性は弱く締りは強い。

SB－4

1．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3cm）7%含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱い。
2．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3cm）15%，ローム塊（径4～20cm）7%，焼土粒（径3～5cm）微量含む。やや軟質で粘性はなく締りは強。
3．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3cm）7%，ローム塊（径4～9cm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱い。
4．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3cm）10%，ローム塊（径5～20cm）5%含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱い。
5．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3cm）20%，ローム塊（径4～6cm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは弱い。
6．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1～3cm）30%，ローム塊（径4～20cm）20%，ロームブロック（径21～40cm）を多量に含む。ややY軟質で粘性はなく締りは弱。
7．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3cm）30%，ローム塊（径4～20cm）20%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強い。
8．ロームブロック層　締りは強い。焼土層と思われる。
9．4と類似するが，ロームブロックを多量に含む。
10．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1～3cm）3%，ローム塊（径4～10cm）1%含む。やや軟質で粘性はなく締りは強い。



第20図　SB－2・4

SB－4

遺構（第20図，図版7F.～H，8A.～D.）

A地区の南西部に位置し，北東約10mにSB－3，南東約6mにSI－6が隣接する。

東・西の両辺は3間（5.3＋αm）以上，西辺は南が不明で（5.5＋αm），南辺は2間4.2m程と推定されるが確認できたのは東端のみである。確認状況から側柱式で南北棟と推定される。柱間は東辺の南より2.5＋2.7m。柱掘方は，南東が径約70cmの円形で深さ60cm，他は0.8～1.1×0.5～0.6mの桁行方向に長い隅丸長方形で深さ60cmであった。いずれも径25～30cmの柱痕跡が見られ，掘方底面に柱当りの認められるものもあった。棟方位はN－6°－Wである。遺物の出土は無かった。

（3）土坑

土坑類は，縄文時代から近・現代にわたるものまで，各種認められたが，埋積土，掘削の状況から近・現代の農作物の貯蔵穴（いも穴）と考えられるものは除外した。古代と推定されるのはSK－3・4で，5・7・8はその可能性をもつが明確にし難い。SK－1・6は縄文時代のTピットと推定される。

SK－3

遺構（第21図，図版9A.）

A地区北東部に位置し，南西約1mにSI－4が隣接する。

確認面はローム（Vb）層で，上部は開墾に伴なう削平を受けている。開口部は平面が径約1.3mの円形である。深さ約20cmで，底面はローム層中にあり，径約1.1mの円形，ほぼ平らである。壁はやや外傾して立ち上がる。埋積土は黒褐色土でローム粒を多量に含み，締りはやや弱い。

遺物（第21図）

埋積土中より土師器坏，甕の破片などが10数点出土したが，いずれも小片で図示し得るものは無かった。

SK－4

遺構（第21図，図版9B.・C.）

A地区の南東部に位置し，東約1mにSI－4が隣接する。

確認面はローム（第Vb）層で，上部は開墾による削平を受けている。開口部は平面が1×0.5mの長方形で，長軸方位はN－87°－Wである。深さ18cmで，底面はローム層中にあり，0.88×0.35mの長方形でほぼ平らであった。壁はやや外傾して立ち上がる。埋積土は黒色土，暗褐色土の2層に大別され，締りが良く，自然埋没である。遺物は出土し無かった。

SK－5

遺構（第21図，図版9D.）

A地区の南西部に位置し，約2.5mにSB－4が隣接する。

確認面はローム漸移層（第Va）層で，上部は開墾時の削平を受けている。開口部は平面が1.15×0.5mの楕円形で，長軸方位はN－38°－Eである。底面はローム層中にあり，深さ15～30cmで東から西に向って下降する。さらに，底面の西端より径約40cmの小穴が斜めに45°の角度で奥行1.2m程掘り込まれていた。埋積土は暗褐色土，黒褐色土の2層に大別され，締りの強い自然埋没と考えられる。なお，斜坑部分の下位60cmほどには，灰黄褐色粘質土の堆積が見られた。遺物は出土し無かった。

SK－7

遺構（第21図，図版9E.）

A地区南端の中央やや東寄りに位置し，北東約６mに同様の土坑SK－８が隣接する。

確認面はローム（第Vb）層で，上部は開墾による削平を受けている。開口部は平面がほぼ真北を長軸とする60×50cmの楕円形である。深さは1.25m，南側はわずかに内傾する程度で垂直に近く，北側は上部の50cmほどが外傾し，これより下方は垂直に近い。底面は径25cmの円形である。埋積土は，黒褐色土，褐色土，にぶい黄褐色土で，締りが強い。なお，底面より50cmほどの厚さで灰黄褐色粘質土の堆積が見られた。遺物は出土し無かった。

SK－８

遺構（第21図）

A地区の中央やや東寄りに位置し，北側の一部が調査区外に延びる。西方約６mにSK－６，南西約６mにSK－７が隣接する。

確認面はローム（Vb）層で，上部は開墾により削平されていた。開口部は，平面が45×50cmのほぼ円形である。深さは約75cmで，北に向かって斜めに掘り込まれており，底面はローム層中にあり，径25cmの円形。壁は底面から開口部に向けて直線的に立ち上がっていた。埋積土は暗褐色土で，締りが強く，下部には30cm程の厚さで灰褐色粘質土の堆積が認められた。遺物は出土し無かった。

SK－１

遺構（第21図，図版８E．F.）

B地区の南東部に位置し，西約４mにSI－３が隣接する。

確認面はローム漸移（Va）層。開口部は平面が270×90cmの長楕円形で，長軸方位はN－55°－Wである。深さ85cmで，底面はローム層中にあり，平面が220×25cmの溝状，南に向かって緩やかに下降し，南端は北より10cm程低い。側壁は外傾するが，両端は僅かにオーバーハングしている。埋積土は黒色土，黒褐色土，明黄褐色土，にぶい黄褐色土で，七本桜，今市軽石粒を含み非常に堅く締まっていた。遺物は出土しない。

SK－６

遺構（第21図，図版８G．H.）

A地区の中央やや東寄りに位置し，北半部が調査区外に延びている。東方約６mにSK－８，西方約２mには小穴列B群が所在する。

確認面はローム漸移層（Va）層で，上部は開墾による削平を受けている。開口部は平面が幅55cm，長さ1.4m以上の長楕円形で，長軸方位はN－18°－Eである。深さ75cmで，底面はローム層中にあり，平面は幅20cm，長さ1.5m以上の溝状である。側壁は外傾して立ち上がり，南端部は11cmほど抉り込まれてオーバーハングする。埋積土は褐色土，黄褐色土，にぶい黄褐色土，黒色土で，七本桜，今市軽石粒を含み，非常に堅く締まっていた。遺物は出土しなかった。

（４）小穴列群

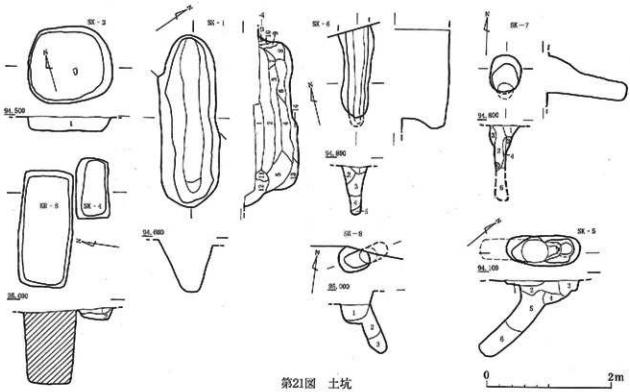
A地区で2，B地区で１の計３群を確認したが，A地区のA群は試掘調査によるもので所在の確認に留まる。

A群

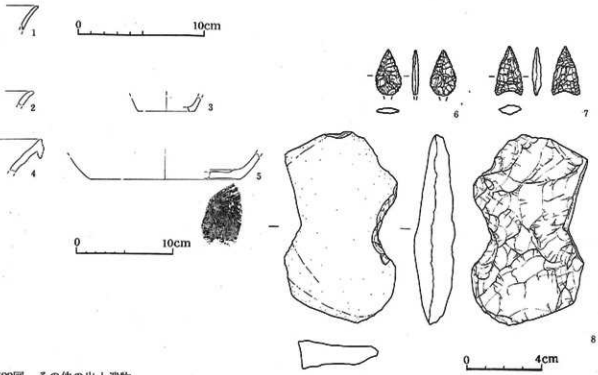
遺構（第10図）

A地区の北西部，10Trで確認し，本跡の西端付近にSB－3，南約３mには未調査部分を挟んでB群が隣接する。

幅２mのトレンチのため，確認したのは東西方向の２列，15口の小穴である。小穴の間隔は1.2～1.3m，列



第21図　土坑



第22図　その他の出土遺物

SK−1（第21図）

1．黒色土（10YR2/1）　今市パミス（径3〜10mm）1%、七本桜パミス（径3〜5mm）2%含む。締りは強い。
2．黒褐色土（10YR3/1）　にぶい黄褐色土（10YR5/4）ブロック（径10〜30mm）が30%混入。
3．明黄褐色土（2.5YR6/6）　ブロック（径10〜30mm）40%、にぶい黄褐色（10YR5/4）ブロック（径10〜40mm）30%、黒褐色土（10YR3/1）ブロック（径10〜30mm）15%の混合土。今市パミス（径5〜15mm）3%、七本桜パミス（径3〜8mm）1%含む。締りは極めて強い。
4．3と類似するが、黄褐色土が5%多く混入。締りは極めて強い。
5．にぶい黄褐色土（10YR5/4）と明黄褐色土（2.5YR6/6）の6：4の混合土。黒褐色土（10YR3/1）3%、ローム塊（径5〜20mm）3%、今市パミス・七本桜パミス（径3〜8mm）1%含む。締りは極めて強い。
6．黄褐色土（2.5Y5/3）と明黄褐色土（2.5Y5/4）ブロック（径10〜50mm）の6：4の混合土。締りは極めて強い。
7．黒褐色土（10YR3/1）とにぶい黄褐色土（10YR5/4）の7：3の混合土。今市パミス（径4〜6mm）2%含む。締りは強い。
8．黄褐色土（2.5Y5/3）と明黄褐色（2.5Y5/4）ブロック（径10〜30mm）の7：3の混合土。締りは極めて強い。
9．ローム主体で黄褐色土（2.5Y5/3）20%が混入。焼塩壁と思われる。
10．黄褐色土（2.5Y5/3）　ローム粒・塊（径2〜10mm）25%含む。締りは弱。
11．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　今市パミス（径3〜10mm）5%含む。
12．灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム塊（径10〜20mm）20%含む。締りは強い。
13．3に類似するが、にぶい黄褐色土（10YR5/4）がやや多い。
14．灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム粒・ブロック（径10〜30mm）15%、今市パミス（径3〜10mm）1%含む。締りは極めて強い。

SK−6（第21図）

1．褐色土（10YR4/4）　ローム粒（径1〜3mm）5%、ローム塊（径4〜5mm）微量、今市パミス（径2〜4mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。
2．黄褐色土（10YR5/6）　ローム粒（径1〜3mm）微量、今市パミス（径3〜5mm）1%、七本桜パミス（径4〜6mm）・小石（径1〜2mm）微量含む。粘性になく締りは極めて強い。
3．にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒（径1〜3mm）3%、今市パミス（径2〜5mm）・七本桜パミス（径2〜5mm）1%、小石（径1〜2mm）微量含む。粘性はなく締りは極めて強い。
4．褐色土（10YR4/4）　今市・七本桜パミス（径2〜5mm）微量含む。粘性になく締りは極めて強い。
5．黒色土（10YR2/3）　ローム粒（径1〜3mm）微量、今市・七本桜パミス（径2〜5mm）微量含む。粘性はなく締りは強い。

SK−3（第21図）

1．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1〜3mm）20%、ローム塊（径4〜20mm）15%含む。粘性はなく締りは弱い。

SK−4（第21図）

1．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1〜3mm）1%含む。小石（径3〜5mm）が3%程混入している。粘性はなく締りは強い。
2．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1〜3mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。

SK−5（第21図）

1．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1〜3mm）3%、赤色・黄褐色パミス（径2〜5mm）、砂粒（径2〜5mm）微量含む。粘性はなく締りは強い。
2．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1〜3mm）1%、赤色・黄褐色パミス（径5〜5mm）微量含む。粘性はなく締りは強い。
3．黒色土（10YR2/1）　ローム粒（径1〜3mm）3%含む。粘性はなく締りは強い。
4．黒褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1〜3mm）7%、ローム塊（径4〜10mm）1%、赤色パミス（径1〜5mm）微量含む。粘性になく締りは強い。
5．暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒（径1〜3mm）10%、ローム塊（径4〜20mm）1%含む。粘性はなく締りは極めて強い。
6．灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　粘性があり締りは強い。

SK−7（第21図）

1．黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1〜3mm）50%含む。やや疎質で粘性はなく締りは弱。
2．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1〜3mm）1%、ローム塊（径4〜10mm）3%含む。粘性はなく締りは強い。
3．褐色土（10YR4/4）　ローム粒（径1〜3mm）10%、ローム塊（径4〜10mm）10%含む。粘性はなく締りは強い。
4．黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒（径1〜3mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。
5．にぶい黄褐色土（10YR5/4）　小石を微かに含む。粘性があり締りは強い。
6．灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　粘性があり締りは強い。

SK−8（第21図）

1．暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1〜3mm）1%含む。粘性は弱く締りは強い。
2．暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒（径1〜3mm）10%、ローム塊（径4〜20mm）1%含む。粘性はなく締りは強い。
3．灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　粘性があり締りは強い。

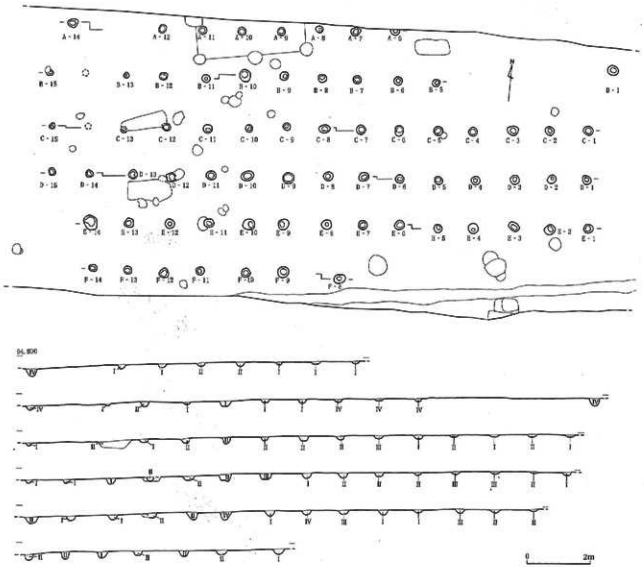
第9表　その他の出土遺物観察表（第22図）

（　）推定値　〔　〕現存値

番号	器種	寸法（cm）	遺存度	整形	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	土師器 坏		小片	ロクロ整形 内面黒色処理	砂粒少量含む	良	淡橙色 内黒色	SK-3 埋土	
2	土師器 甕		口辺部片	内・外面ナデ	粗砂粒多量混和	並	暗褐色	SK-3 埋土	
3	土師器 甕	底径（6.0）	底部片	体部外面ヘラ削り	粗砂粒多量混和	良	浅橙色	SK-3 埋土	
4	須恵器 甕		口辺部片	ロクロ整形	粗砂粒含む	良	淡赤褐色	SD-1 埋土	
5	須恵器 甕	底径（16.0）	底部片	ロクロ整形 底部外面ヘラ削り	粗砂粒含む	良	灰色	SD-1 埋土	

〈石器〉

No.	種別	最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	出土位置	備考
6	石鏃	(2.4)	1.4	0.3	(1.0)	チャート	SI-3 埋土	有茎、茎欠損
7	石鏃	2.6	1.5	0.5	1.3	チャート	SI−4 埋土	無茎 凹基
9	石斧	10.1	6.0	1.5	108.4	ホルンフェルス	SI−4 カマド	カマド埋内



第23図　小穴列B群

小穴列B群
Ⅰ　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒（径1～3mm）5%，ローム塊（径5～8mm）3%含む。やや軟質で粘性はなく締りは並。（A列PT-6転）
Ⅱ　Ⅰと同様だがローム・ブロックを少量含む。（A列PT-9転）
Ⅲ　ⅠとⅡのタイプの赤色粒（径1～3mm）が微量混入している。（C列PT-6転）
Ⅳ　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒（径1～3mm）1%含む。軟質で粘性は弱く締りは並。

と列の間隔は1.5m。南側の列は12口，長さ14m程を確認したが，東を除く三方に広がると推定される。

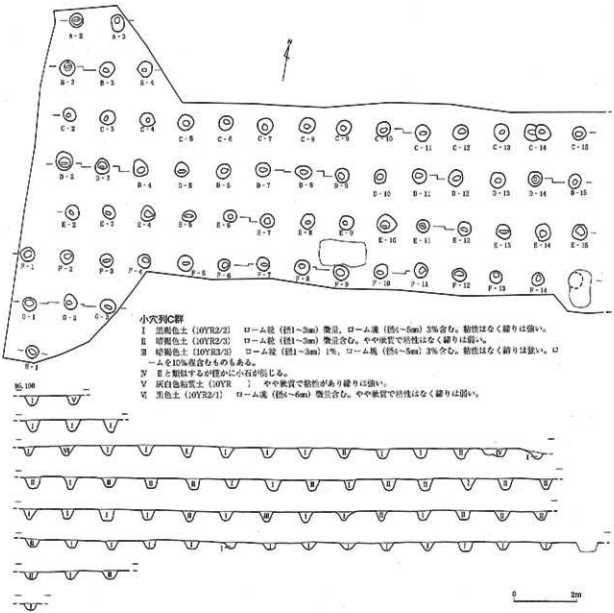
確認面はローム漸移層で，上部が後世に削平を受けていて，小穴は平面が径15～20cmと全体に小振りである。平面確認のみであり，埋積土，深さ等は明確にし難い。列の方位はN－89°－Eである。

B群

遺構（第23図，図版9F・G.）

A地区の中央南寄りに位置する。北約3mにA群が隣接し，北西でSB－2と重複するが柱穴との切り合いはない。

調査区内で東西方向の6列，総数66口の小穴を確認した。小穴の間隔は1.1m，列と列の間隔は1.6mで，最長は15口，長さ17mほど確認し，南北の広がりは約8m。東を除く三方へ広がると判断される。列の方位はN－87°－Eを示す。確認面はローム漸移層であるが，上部が後世に削平を受けているため，小穴は平面形が径19～36cmの円形，深さ5～20cmと規模にばらつきが大きい。埋積土は概ね4種（Ⅰ～Ⅳ）に大別される



第24図　小穴列C群

が基本的には黒褐色土で締りが良く，稀に暗褐色土のものや今市軽石粒の混じるものも見られた。小穴の底面及び壁面に掘削時の工具痕などは認められなかった。また，埋積土・底面などに柱の痕跡なども見られなかった。

遺物は，E列5の小穴確認面で近世以降の陶片が出土したが，耕作土直下であり，本跡に伴うか否かは明確でない。

C群

遺構（第24図，図版9H.，10A.～F.）

B地区の北西端に位置する。

調査区内で東西方向の9列，総数72口の小穴を確認した。小穴の間隔は1.2m，列と列の間隔は1.5mである。最長で15口，長さ18m程確認し，南北の広がりは12m。東を除く三方にさらに広がると判断される。列の方位はN－87°－Eを示す。確認面は黒褐色土層であるが，上部はいくぶん後世に削平を受けている。小穴は

平面が径40～50cmの円形，深さ20～40cm。底面はローム層中にあり，底面及び壁面に掘削時の工具痕のこるものも見られた。埋積土は，概ね6種（Ⅰ～Ⅵ）に大別されるが，基本的には黒褐色土と暗褐色土で構成され，一部灰と思われるものが含まれるものも認められた。締りは一定しないが，下層ほど締りが弱い傾向が見られる。遺物は出土しなかった。

（5）溝跡

A・B両地区で東西に延びる溝を各1条計2条確認した。ともに，地境付近にあって，耕地の地境溝，根切り溝と判断され，B地区では再利用したかたちで塩ビ管が埋設されていた。A地区のものは調査区の南端を東西に延び，古代の住居跡2軒，農耕関係の土坑などと重複しており，埋積土より土師器，須恵器等の古代の遺物も出土したが（第22図），遺構に伴なうものではない。

3まとめ

今次調査区は，東山道跡を探す試掘調査によって新たに確認された，古代の集落跡を主体とする遺跡である。なお，前述の如くA・B両地区の間を通る幅3m程の市道が，地元の人々に「奥州街道」或は「こうしゅう街道」と呼ばれ，古道の名残と伝えられることから，推定東山道跡の可能性が想定された。また，本遺跡の南方の杉村遺跡で確認された推定東山道の駅路が，同じく駅路が確認された北方の平出地区上野遺跡に向って延びるとすれば，宇都宮環状線関連の遺跡調査の成果（いずれからも確認されない）からも，上記の市道付近が最も可能性が高いとされてきた。しかし，平成18年に実施した，本調査区の南方約400mの瑞穂野団地遺跡東地区の調査では，この市道脇から東に130m程調査したが道路跡は認められず，道より西側との想定がなされた。

今次調査ではこの市道の東・西両側をそれぞれ70m程調査したが，その痕跡は全く認められなかった。なお，現道を残しての調査ではあったが，道路幅から推して全体がこの下になっているとは考え難い。また，開墾による削平がローム層まで及んでいる部分も見られるが全てが削平されたとも思われない。したがって，この地区における駅路のルートは再び白紙状態となった次第である。とはいえ，東側は延2.4kmに及ぶ試掘調査を実施しており，当開発区域より西側の地域であろうことは断言できる。

今回新たに確認された西刑部上原遺跡は，開発区域の北西隅にその南端が含まれ，区域内における推定面積は8，000㎡程である。しかし大部分は一般住宅地として盛土保存が可能であり，調査対象は道路部分と抜根によって地下の遺構に影響が及ぶ部分の計1，900㎡程に限定された。この為調査区は変則的な形状となっているが，古墳時代後期から平安時代にわたる竪穴住居跡6軒，掘立柱建物跡4棟などを確認した。なお，B地区の平安時代の住居跡1軒と縄文時代の土坑1基の他は大部分が西側のA地区に集中しており，B地区付近が遺跡の南東端に位置すると判断される。

これらのうち，東方のB地区に単独で所在するSI－3は，約3.8×5mの一般的規模の住居であるが，西壁寄りの床面付近より奈良三彩の小壺の下部が出土した。管見によれば栃木県内で三彩小壺の出土は，下野市下野薬師寺跡，上三川町薄市遺跡，足利市助戸遺跡について県下で4例目となる。国府・国分寺跡等からも出土が確認されていない本県において，下野薬師寺跡は無論，足利郡衙の関連集落である助戸遺跡や村落内寺院等の仏教施設の存在が推察される薄市遺跡からの出土は何とか納得できるものの，本跡のように集落のはずれに単独で所在するような住居にいかなる事情でもたらされたものか興味深いところである。しかも，

本跡では他には土師器坏に「田□」と記す墨書土器数片出土しており識字層の住居である可能性は高いものの，これら以外に取り立てて特徴ある遺物はない。ただ，前記の通り未だその所在が確認されてはいないが，推定東山道が近くを通っていたであろうことと全く無縁ではないと考えたい。

次に，西側のA地区で確認したSI－４・６は一辺3.5～4.2mの方形でともに北壁の東寄りにカマドが構築されていた。さらにこの２軒は，竪穴の床面に高低差があり，西に比べ東が10～15cm程低く造られており，その中間に炉が設けられているなどの共通点が見られた。日常生活に直結する火処がカマドとすれば，炉はそれ以外の目的で設けられたと推察される。SI－４は埋積土の下位より鉄滓が数点出土したが，フイゴの羽口や明確な金床石，鍛造薄片などは認められなかった。したがってこれらの住居を鍛冶工房とは断定できないが，何らかの工房的性格を持つと推考する。なお，SI－４からは多数の土器類に混じって石製紡錘車が出土し糸紡ぎが行われたと推察され，専用工房ではなく兼業的なものであろうか。

掘立柱建物跡は４棟を想定したに過ぎないが，本来はさらに高い密度で存在したと推察される。なお，いずれも部分的な確認で，建物の規模・形態は明確にし難い。しかし，多くは柱掘方が径45～55cmの円形で，唯一長方形の掘方のSB－４ですら梁行２間，桁行は３～４間である。いずれも小規模な建物跡と推察され，棟方位もばらつきが多い。遺物の出土はないが，埋積土の状態から集落に伴なう古代の建物跡と判断した。

A・B両地区より計３群の小穴列群を確認した。A地区のA・B群の小穴は上部が後世の削平を受けていて，径15～36，深さ５～20cmと小さく，浅かったが，B地区のC群は径40～50cm，深さ20～40cmであり，A・B両群とも本来はC群と同様の規模であったと推察される。また，３群とも東西方向の小穴列が南北に数条並ぶもので，小穴の間隔は1.1～1.3m，列と列の間隔は1.5～1.6mで，それぞれの群はほぼ等間隔である。最長で15口，18m程，南北の広がりは９列，12m程であった。列の方位は，N-87～89°－Eでいずれも磁北に直交する。確認当初はあまりにも規則的に並ぶことから何らかの建物と考え，柱穴列と名称したが，調査の進捗にともない平面・断面観察とも柱穴の痕跡が認められず，小穴底面にもそのような形跡は見られなかった。また，C群では掘削時の工具痕の残るものがあり，鋤・鍬よりは所謂「鋤簪」に近いもののように見えた。調査を終了した現在も，時期・性格とも不明と言わざるを得ないが，近世とするよりは近代の建物以外の行為に伴なうものとするに留める。なお，類例として管見に触れたものに，小山市外城遺跡第10次調査区の１号柱穴列がある。径・深さともに20cm前後，23基（口）前後が北東から南西方向に連なり，10列が等間隔で並ぶ。柱穴の間隔は0.8m，列と列の間隔は1.6mであった。また，列と列の間，或は列を１条省いてそこに溝状の施設が設けられるなどしていた。小穴の間隔は本遺跡の３分の２程度と狭いが，列の間隔がほぼ同様であり，小穴内に柱痕跡が見られず，埋積土に灰状のものが混じるなどの共通点も見られた。こちらも建物跡でなく，近世以降の施設と想定されており（鈴木一男2006），本遺跡の所見とほぼ同様であるが，その性格は明確にし難い。

擱筆にあたり、事業主であるトヨタウッドユーホーム㈱の学術に対する理解を高く評価するとともに、調査に対してご助力を賜った多くの方々に深謝し、また当地に眠る古代人の御霊の安らかなることを祈念する。

参考文献

岩上照朗・石橋知明『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』 1978 宇都宮市
瑞穂野土地区画整理組合・宇都宮市教育委員会

川原由典・中山晋『猿山遺跡 付 久部台古墳群』 1981 栃木県教育委員会
足利市遺跡調査団・足利市教育委員会 『昭和58年度 埋蔵文化財調査概報』 1984

秋元陽光 『尊市遺跡・大山遺跡』 1988 上三川町教育委員会

梁木 誠・今平利幸 『下桑島西原古墳群』 1992 宇都宮市教育委員会

須田 勉 『下野薬師寺跡―史跡整備に伴う発掘調査』 1994 国士舘大学文学部考古学研究室

中山 晋 『砂田東遺跡・上横田A遺跡』 1996 栃木県教育委員会

井上喜久男他 『日本の三彩と緑釉―天平に咲いた華』 1998 愛知県陶磁資料館

篠原浩忠他 『成願寺遺跡』 2000 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

杉浦昭博 『大岡台遺跡』 2001 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

巽淳一郎編 「奈良三彩関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』 2002 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

鈴木一男 『外城遺跡Ⅲ―第10次発掘調査報告―』 2006 小山市教育委員会

報告書抄録

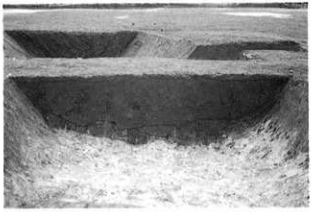
ふりがな	みずほのだいいせきぐん
書名	みずほの台遺跡群Ⅱ
副書名	根本西台古墳群第3次・西荊部上原遺跡
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第69集
編著者名	水野順敏・柏崎広伸
編集機関	株式会社 日本窯業史研究所
所在地	〒324－0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL0287－93－0711
発行機関	宇都宮市教育委員会
所在地	〒320－8540 栃木県宇都宮市旭1－1－5 TEL028－632－2764
発行年月日	2008/3/31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ねもとにしだいこふんぐん 根本西台古墳群	うつのみやしとこいしはらかべまち 宇都宮市西荊部町 あざくしいはの 字櫛岩2535番地 他	9201	3325	36°30′30″	139°56′3″	2007.7.3～2007.8.21	1,400㎡	宅地造成
にしだいはらかみはらいせきぐん 西荊部上原遺跡	うつのみやしとこいしはらかべまち 宇都宮市西荊部町 あざかみはら 字上原2593番地2 他	9201	－	36°30′25″	139°55′36″	2007.7.24～2007.9.14	1,900㎡	宅地造成

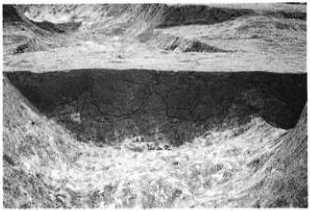
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根本西台古墳群	古墳	古墳時代後期	円墳 1基 土坑 17基 溝 1条	土師器，鋼貨	1基が群から離れて所在する。
西荊部上原遺跡	集落跡	古墳～平安時代	竪穴住居跡 6軒 掘立柱建物跡 4棟 土坑，溝，小穴列群	土師器・須恵器・墨書土器・三彩小壺・鉄滓・石斧・石鏃	新規発見の遺跡。三彩小壺片が住居跡より出土。

A.22号墳石室確認状況（南より）

B.22号墳全景（南より）



C.22号墳周溝北側土層



D.22号墳周溝東側土層（南より）

E.22号墳石室（南より）

F.22号墳石室（北より）

図版2

A.22号墳石室側壁（東より）

B.22号墳石室根石・敷石上層（南より）

C.22号墳石室根石・敷石下層（南より）

D.22号墳石室根石（北より）

E.22号墳石室掘方（南より）

F.22号墳石室側壁断面（北より）

G.SK－57土層（南より）

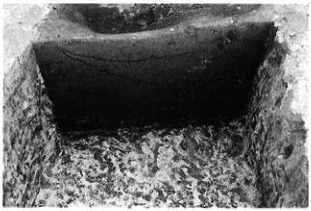
H.SK－57・手前周溝（南より）

A.SK－53・手前周溝（西より）

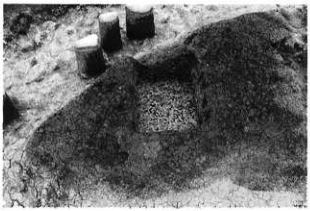
B.SK－55・手前周溝（南より）

C.SK－56土層（南西より）

D.SK－56（南より）



E.SK－54土層（東より）



F.SK－54（東より）

G.SK－58（南より）

H.SK－59（北より）

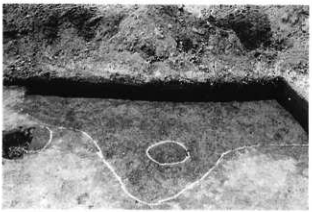
図版4

A.A地区南側全景（東より）

B.A地区南側全景（西より）

C.B地区南側全景（西より）

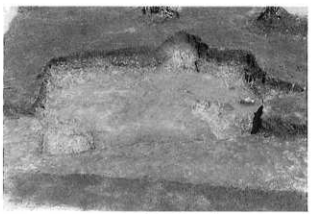
D.SI－1（南より）



E.SI－2（北より）

F.SI－3東西土層（南より）

G.SI－3



H.SI－3掘方（南より）

A.SI－3掘方（西より）

B.SI－3北カマド（南より）

C.SI－3東カマド（西より）

D.SI－3三彩小壺出土状況

E.SI－3遺物出土状況

F.SI－4（南より）

G.SI－4掘方（南東より）

H.SI－4カマド土層（東より）

図版6

A.SI－4カマド内遺物（南より）

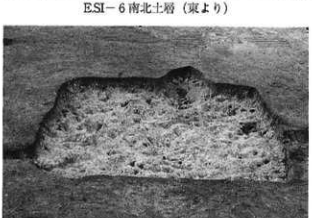
B.SI－4カマド（南より）

C.SI－5（南より）

D.SI－5掘方（南より）

E.SI－6南北土層（東より）

F.SI－6（南より）



G.SI－6掘方（南より）

H.SI－6カマド東西土層（南より）

A.SI－6カマド（南より）

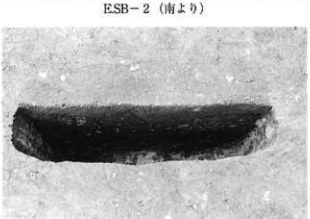
B.SI－6カマド遺物出土状況（南より）

C.SI－6カマド出土遺物（南より）

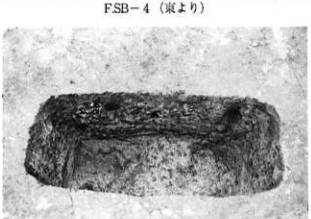
D.SB－1（北より）

E.SB－2（南より）

F.SB－4（東より）



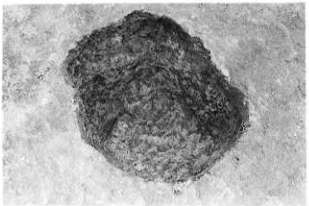
G.SB－4　PT－1土層（東より）



H.SB－4　PT－1掘方工具痕（東より）

図版8

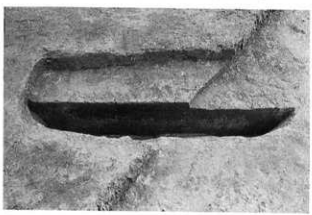
A.SB－4　PT－3セクション（東より）



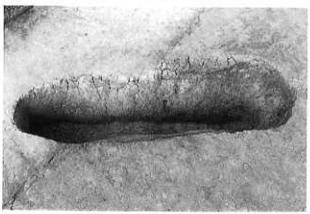
B.SB－4　PT－3掘方工具痕（東より）

C.SB－4　PT－5セクション（南西より）

D.SB－4　PT－5掘方工具痕（西より）



E.SK－1土層（東より）



F.SK－1（北より）

G.SK－6土層（南より）

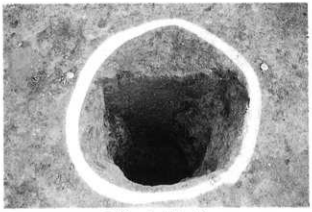
H.SK－6（北より）

A.SK－3（西より）

B.SK－4（右）,近代土坑（左）土層（西より）

C.SK－4（右）,近代土坑（左）（西より）

D.SK－5（東より）



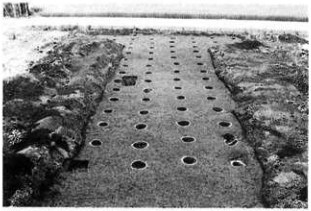
E.SK－7（南より）

F.小穴列B群全景（西より）

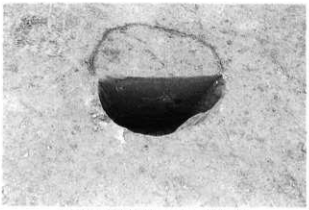
G.小穴列B群全景（東より）

H.小穴列C群全景（南より）

図版10



A.小穴列C群全景（東より）



B.小穴列C群土層タイプⅠ（南より）

C.小穴列C群土層タイプⅡ（南より）

D.小穴列C群土層タイプⅢ（南より）

E.小穴列C群工具痕

F.小穴列C群工具痕

G.近代土坑堆積土（西より）

H.A地区基本土層1（南より）

11−1（SI−1）

11−2

11−13

11−1（SI−2）

11−12

11−13下

14−2

14−3

14−1

14−2

14−3

14−1下

14−5

14−9

14−9上

図版12

14－10上部

14－8

14－12

14－10下部

14－17

15－19

14－16

15－20

17－5

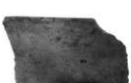
17－6

18－1

18－2

19－2

19－1



19－4

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第69集

みずほの台遺跡群Ⅱ

発行日　平成20年3月31日
編　集　株式会社　日本窯業史研究所
〒324-0611
栃木県那須郡那珂川町小砂3112
TEL(0287)93-0711
発　行　宇都宮市教育委員会文化課
〒320-8540 宇都宮市旭1-1-5
TEL(028)632-2764
印　刷　株式会社　松井ピ・テ・オ・印刷